

伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇一三年 第七十号



伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.70 2013

伊能大図八一号 長野 (部分)

(国立国会図書館蔵)

最近、長野県須坂市福島の市川美津夫さんが入会された。趣味は地図とウォーキングで、同好のグループの御世話もされているという。大変嬉しく思い、長野の市川グループに敬意を表して、表紙図に長野を選ぶことにした。

筆者が伊能研究を始めた頃の先輩に、故人だが白井良作さんという方がいる。信州麻積(オミ)宿の十五代続いた本陣の当主で、東京に出て一部上場会社の役員などされていたが、晩年は古文書と伊能研究に過ごされた。

初めて世田谷伊能家に伺ったとき、書棚に白井さん謹呈の「古文幻想」という会報(筆者の伊能図探しの記事を掲載)があつてビックリした。伊能権之丞家を通じて挨拶があつたという。見えない糸でつながっていた方である。

白井さんは、信州における伊能の足跡をたどつて、史料・写真を集めており、本にする意向を持つておられた。原稿用紙見開きで厚さ五センチくらいになる膨大なものである。御自分の限界を感じられたのか、それを私に任された。

それで、長野県に然るべき方がいないか、ずつと悩んでいた。長野は教育県なのだが、入会はなかった。NTTのOBに入力を頼んで断られたこともある。

それが、市川さんに相談したところ、自分も調べ始めようと思っていたと、快諾をいただいた。

白井研究を検証していただき、教育県・長野に相応しい伊能研究の決定版の登場を、心から期待している。応援しますので、頑張ってください。

表紙図の話を少し書こう。伊能隊は第三次測量で出羽、越後の海岸を測り、直江津から北国街道を善光寺へ出る。日記には、逗留「此朝善光寺参拝」と出てくる。あと上田、小諸をとおつて、中山道に出て江戸にもどった。

最後の第八次測量(九州測量)の帰路では、高山から野麦峠をへて、塩尻、松本から再度善光寺へ出る。この途中に白井氏の先祖が本陣を務めた麻積村があり、この時の記録を拙著「伊能測量隊まかりとおる」に使わせていただいた。

豊野から飯山まで進んで反転し、須坂、松代、戸倉から軽井沢へ向かった。再度の善光寺訪問の意図は分からないが、信州北部の測線を充実したかったのであろうか。このため真田氏の松代と堀氏の須坂を測線が通ることになった。

善光寺再訪では「六ツ時出立。我ら善光寺本堂制札前より初め、北国街道重測(再度測ること)」とあるばかりである。西国測量を終わり余裕の段階にあつた忠敬は、あらためて参拝・祈念の必要は無かつたのであろうか。

地図面中央を信濃川が兩岸に大きな砂洲(黄色)を持ちながら蛇行する。犀川と千曲川の合流点には巨大な砂洲が描かれている。

善光寺は地図で見ると長野村善光寺宿で、善光寺領であることがわかる。善光寺周辺には真田領が目立つ。

渡辺一郎(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

目次

70号

グラビア

●伊能図の旅

星埜 由尚

大図第二十二号の部分

厚岸

大図第一八七号の部分

太宰府周辺

大図第一二五号の部分

琵琶湖東岸

近江八幡・彦根

話題

●伊能忠敬研究会 総会講演記録

東日本大震災 香取市と伊能家旧宅の被災と復興

香取市長 宇井成一

6

●伊能忠敬周辺の女性の手紙(二)

小島一仁先生古文書講座の史料から 加藤 時男

11

コラム「日本水準原点」(伊能 洋氏描画)

●史料解説

高橋(景保)御用日記(四) 安藤由紀子

16

●伊能忠敬 周辺の人②

高橋作左衛門景保 前田 幸子

21

『伊能図大全』全七巻 刊行!!—全国巡回フロア展を座右に—

●新説 伊能忠敬物語 第一話

伊能忠敬はなぜ測量をはじめたか(二) 渡辺 一郎

30

忠敬談話室

●江波島の絶景—忠敬が見た風景

前田 幸子

36

●山武歳時記

神仏をお迎えする 「お盆」 江口 俊子

38

●雑学 アナログとデジタル

宮内 敏

39

資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第七回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

40

監修 渡辺 一郎 編著 井上 辰男

49

ニュース・お知らせ

・二〇一三年度 伊能忠敬研究会総会開催・新役員リスト

49

・事務局長退任ならびに代表理事就任にあたって

事務局

・事務局長就任にあたって

鈴木 純子

・H25年度九州支部例会報告

鈴木 純二

・伊能忠敬銚子測量記念碑除幕式参加と銚子ジオパーク

石川 清一

研修旅行の御案内

宮内 敏

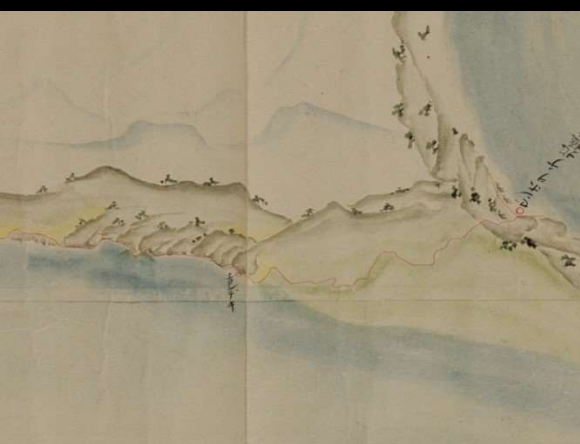
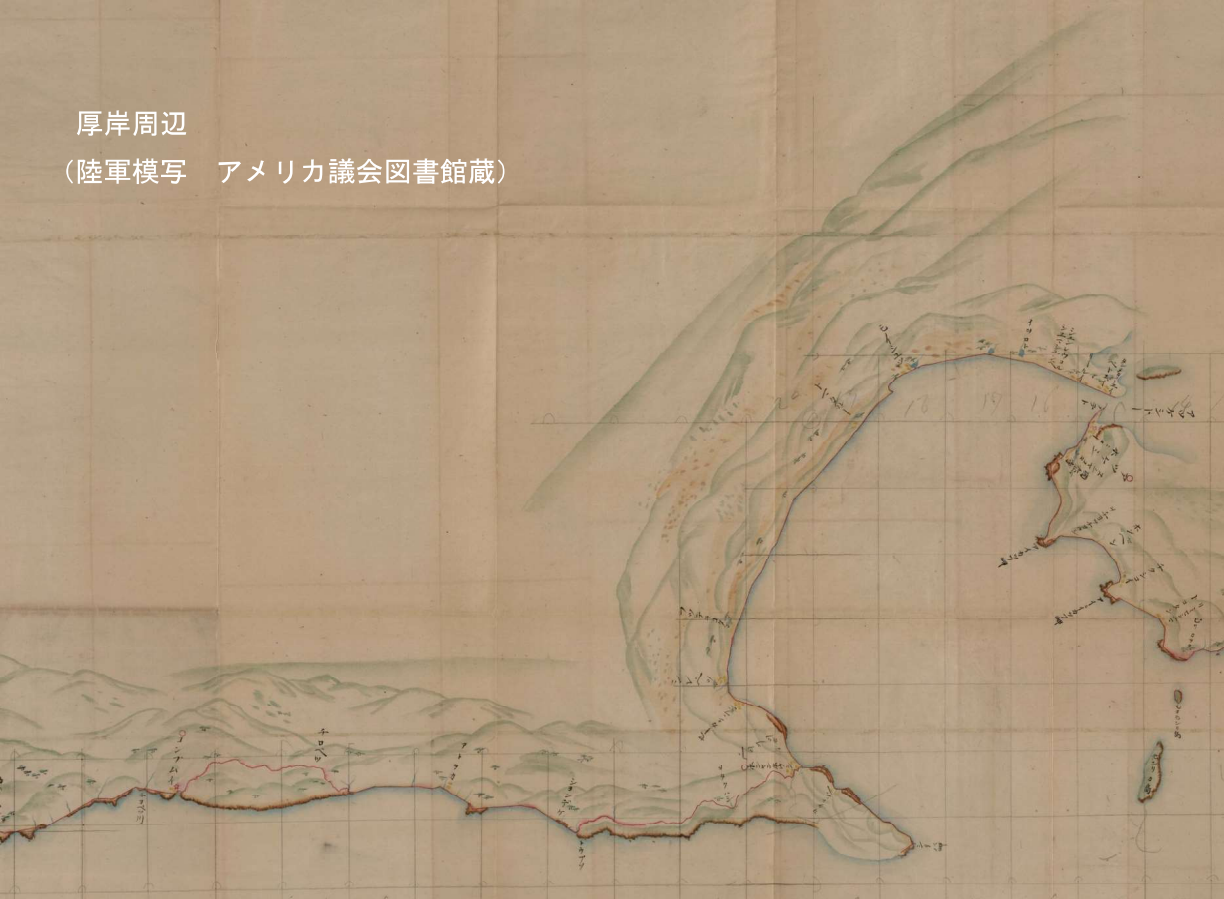
高宮 勲

高宮 勲

厚岸

厚岸周辺

(陸軍模写 アメリカ議会図書館蔵)



「松前距蝦夷行程測量分図」
トマチセ子ツフ・ゼンホヲチの部分
(国立公文書館蔵)

大図第22号
シヨンデケ・センホウシの部分拡大図

厚岸

第一次測量の最終到達地はニシベツ(西別、現在の本別海)であったが、道線法で測量を進めてきたのは、厚岸湾に臨むセンホウシ(仙鳳趾)までであった。センホウシで船に乗りアッケシ(厚岸)に向かい、アッケシからアンネベツ(姉別)を経由し風蓮湖を船で渡ってニシベツまで行った。アッケシとアンネベツで天測を行っているが、道線法による測量は行っていない。従って、第一次測量の成果図である「松前距蝦夷行程測量分図」(国立公文書館所蔵)には、測線はセンホウシまでで、その先には測線は描かれていない。

伊能測量最終成果の模写本である陸軍模写図(アメリカ議会図書館所蔵・アメリカ大図)には、アッケシ湾を巡る測線がキラタツプ(霧多布)からネモロ(根室)を廻ってニシベツに至るが、アンネベツの地名が記載されず、天測記号も描かれていない。

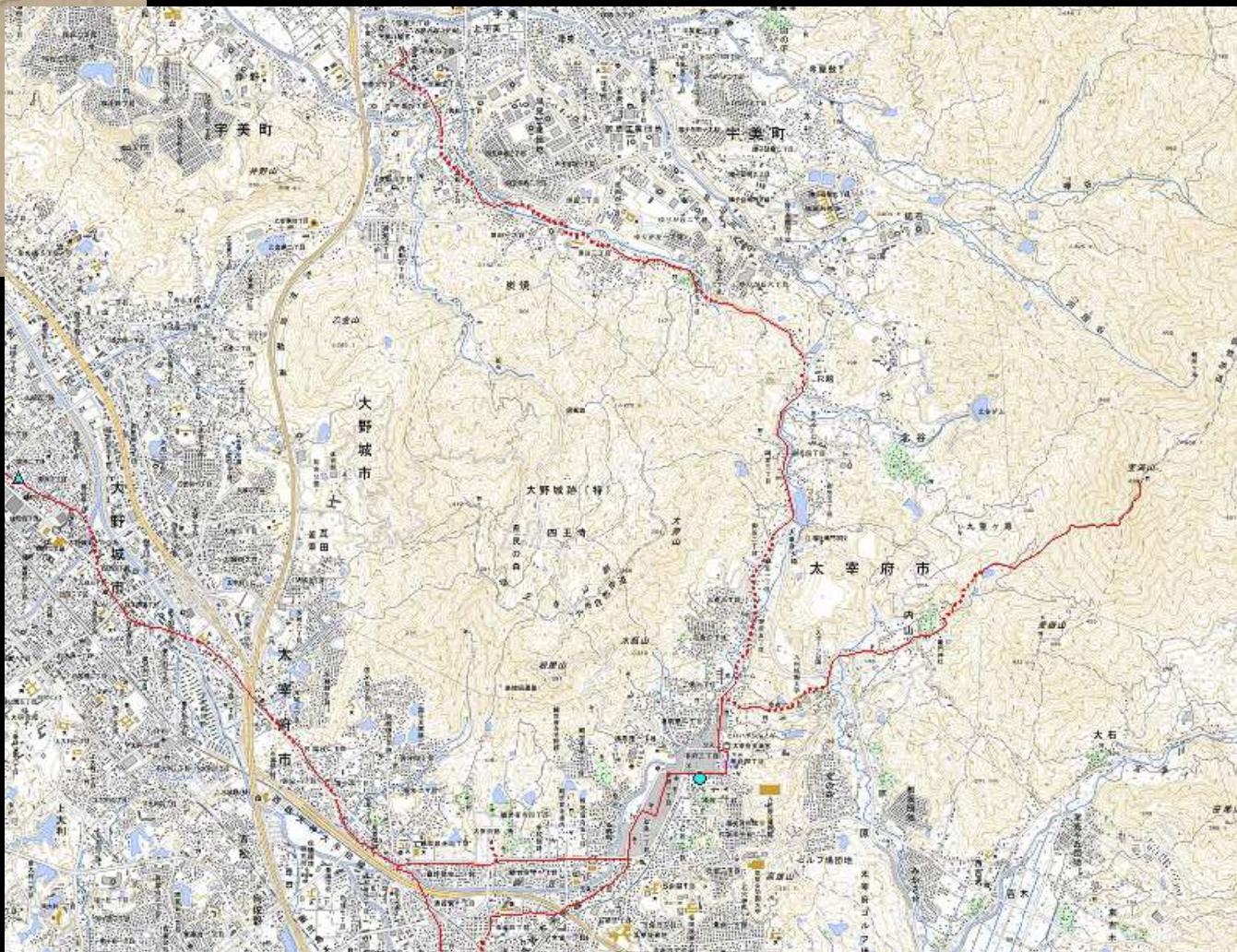
「松前距蝦夷行程測量分図」とアメリカ大図の測線をみると、両者ともシヨンデキからセンホウシまで測線は海岸を離れ山越えしている。しかし、両者の測線の軌跡は一致せず、大きなずれがある。これは、第一次測量において測量した路程と最終成果に示された路程とが異なることを示している。シヨンデキまでの海岸線の測線も、第一次測量の測線の出入りが多少あるのに比べ、最終成果では長い直線の測線が描かれ単調である。

このように、最終成果においては、第一次の測量成果は採用されていないようである。前号において室蘭の例を紹介し、同様の結論を述べたが、蝦夷地の伊能図は、その大部分が間宮林蔵の測量成果に基づく可能性が高いことを暗示しているのではないだろうか。

太宰府周辺

左：大宰府から竈門山・宇美八幡宮
(陸軍模写 アメリカ議会図書館蔵)

下：竈門山・宇美八幡宮測線と地形図の重ね図
(東京カートグラフィック猪原氏作成)
赤線は測線、緑色○は宿泊地



太宰府

九州第二次測量において、屋久島・種子島の測量を終え、人吉、阿蘇など九州山地を横断して測量を行い、小倉から博多、唐津、伊万里、佐賀などを廻って文化九年九月二十六日太宰府に到着した。この間、教度にわたって本隊と支隊に分けて測量を進めている。宰府本町に宿泊した測量隊は、翌日二手に別れ、忠敬本隊は、竈門(かまど)山を測り、坂部支隊は宇美八幡宮を測った。

このとき忠敬は、満年齢で六十七才であり、測量日記には、「我らハ残」と記されているので本人は登らなかった(私は、これまで忠敬が登山したと思い、そのように書いたこともあるが、測量日記をよく読むと忠敬は登山していないようである。ここで訂正したい)ようだが、他の隊員たちは、竈門山(現名:宝満山八二九m)山頂まで登り、竈門神社の奥社まで測っている。測量日記には、途中に鎖場があり、英彦山よりも険しいと記している。一方、坂部隊は、宇美八幡宮まで測線を延ばし、既設の測線に繋ぐことなく、その後は無測で山越えし、博多から太宰府に向かう測線上に位置する筒井村に宿泊した。既設測線に閉合することなく、宇美八幡宮まで測量することが目的であったと考えられる。

このように、忠敬の本隊が登山して竈門神社奥社まで測量し、坂部隊は、宇美八幡宮への測量も既設測線に繋がず、測量精度の向上に役立たない測量をわざわざ行っているのは、宗教施設の位置を明示することが必要であったからであろう。西日本測量においては、神社を頻繁に測量しており、大図にも、寺社に向かう行き放しの測線が多数見られる。これは、寺社の測量に目的があったからであり、単に信心の深さ、名所めぐりでは理解できない意義があったものと思われる。

琵琶湖東岸 近江八幡〜彦根

左：近江八幡〜彦根
（陸軍模写 アメリカ議会図書館蔵）

下：湖東平野測線と地勢図の重ね図
（東京カートグラフィック猪原氏作成）
茶線が朝鮮人街道、緑線はその他の測線



琵琶湖東岸朝鮮人街道

琵琶湖東岸は、伊能全国測量において、詳細に測量された地域である。第五次測量においては、紀伊半島の測量を終えて後、文化二年（一八〇五）八月に琵琶湖湖岸を

一周して測量を行い、その後中国地方の測量を終えて敦賀から二手に分かれて琵琶湖の東西を測量した。琵琶湖東岸は、このときに朝鮮通信使が通つたいわゆる朝鮮人街道を測量し、第七次測量において中山道を測量した。従って、琵琶湖東岸には、湖岸、朝鮮人街道、中山道と三本の測線が並行している。

朝鮮人街道は、脇街道である京道、八幡道、彦根道をつなぐ街道で、守山市行畑（伊能大図には、行合村と中畑村があり、両者の合成地名と考えられる）で中山道から別れ、近江八幡を通り、安土を通過して彦根に至り、鳥居本宿で中山道と合流する。徳川家康は、関ヶ原の戦いに勝利して、この道を通って凱旋したところから、吉例の道とされ、将軍専用の道で、西国大名が参勤交代の時に利用することは許されていなかった。しかし、朝鮮通信使にはこの道を通過させたので、朝鮮人街道と称するようになったと言われている。

第七次測量の往路復路で中山道を通過し、測量しているが、何故、五街道の一つある中山道に先駆けて脇街道の朝鮮人街道を測量したのか、理由があったに違いない。将軍の道であったためであろうか。朝鮮通信使が最後に朝鮮人街道を通つたのは、将軍家治襲封祝賀の宝暦十四年（一七六四）の時であり、文化八年（一八一二）の家斉襲封祝賀のための通信使は、対馬で差し止められたため、朝鮮人街道を行列が通ることはなかった。

伊能忠敬研究会 総会講演記録

東日本大震災

香取市と伊能家旧宅の被災と復興

香取市長 宇井成一

(編集部注) 震が関ビル 35 階東海大学校友会館に於いて開催された 2013 年度の伊能忠敬研究会総会の席上で、今年 3 月に入会された、香取市の宇井成一市長にお願いして、東日本大震災「香取市と伊能家旧宅の被災と復興」と題して約 30 分間、御講演いただきました。

一昨年三月十一日に発生した「東日本大震災」では、千葉県に於いても各所で被害状況が報告されております。今回宇井市長から被害を受けた香取市の現状や復興への取り組みについて、具体的に分かり易くお話いただきました。

香取市は市中を利根川が流れているので、その周辺では液状化現象に依る被害を受けたこと、伊能家旧宅を含めた重要伝統的建造物群保存地区にある 80 棟以上の歴史的建物が大きな被害を受けたこと、ライフラインは来年 3 月までには復旧完了する予定であり、伊能家旧宅の店舗、書院、土蔵も平成 26 年度中に修理を完了するという明るい見通しをお話いただきました。

講演内容およびパワーポイント画面の要点を紹介させていただきます。(渡辺、高宮記)

*

一昨年の三月十一日に発生しました東日本大震災による香取市の被害とその後の復旧状況について、

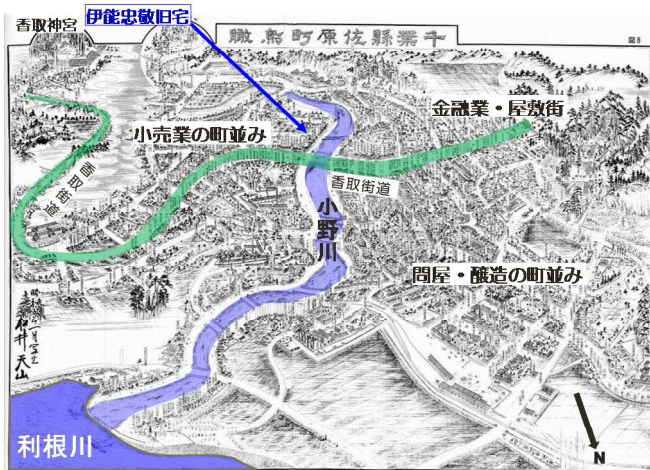


図-1 佐原市街地の図 昭和 5 年

て、大きな被害をもたらした液状化と伊能家旧宅付近の歴史的町並みの現状をご説明いたします。香取市は千葉県北東部に位置しており、東京から概ね 70 km 圏、世界の玄関口・成田国際空港がある成田市に隣接する人口約八万三千人の農業を基幹産業とする地方都市です。平成十八年三月に一市三町が合併して香取市になりました。

この図は昭和五年の佐原市街地の鳥瞰図で、利根川舟運で栄えた町並みが描かれています。手前が北で、南北に流れる「小野川」と、東西に続く「香取街道」が交差する箇所の近くに、昭和五年に国の史跡に指定された伊能忠敬の旧宅がございます。

付近には江戸時代後期から昭和初期にかけての古い商家や土蔵が現在も数多く残り、平成八年に関東で最初に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。



図-2 重要伝統的建造物群保存地区

重伝建地区は、香取街道と小野川が交差する忠敬橋を中心に、東西約 400 m、南北約 500 m の区域で、地区内には伊能家旧宅の他に、千葉県指定の有形文化財や市特定の伝統的建造物など数多くの歴史的建物が今も残っています。

以下、一昨年に発生した東日本大震災による香取市の被害と復旧状況についてご説明いたします。香取市は震源地の宮城県沖から約 320 km の距離にあり、震度は 5 強でした。

また、その約 30 分後に発生した茨城県沖の余震



倒れた門塀や落ちた屋根瓦が道路をふさぐ

図-4 地震による被害

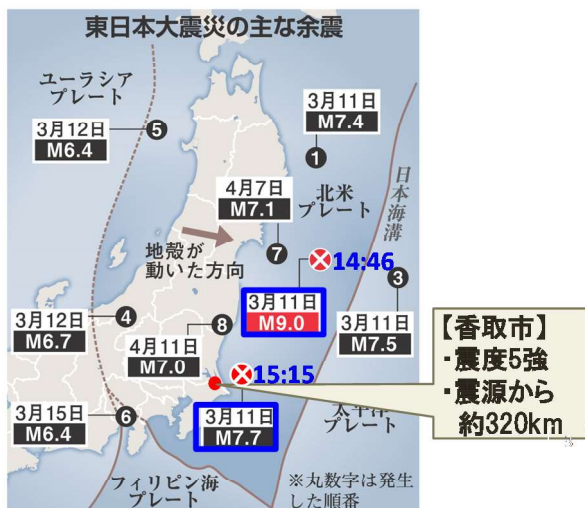


図-3 東日本大震災の主な余震

でも、ほぼ同じ震度5強でした。この連続した2つの地震により、市内では大きな被害が発生しました。



小野川護岸と市道が被災、山車の通行が懸念

図-6 歴史的な街並みの被害

小野川護岸とともに周辺道路も被災し、伝統のある山車祭りの開催も危ぶまれる事態となりました。

重伝建地区では、伊能家旧宅や県指定文化財など、80棟以上の歴史的建物が、瓦が落ちたり、壁が剥がれるなどの被害を受けました。



80棟以上の歴史的建物が被災！

図-5 歴史的な街並みの被害



図-8 佐原地区市街地の液状化地域

さらに液状化地域を重ねると、旧河道や湿地を埋めて造成した地域で液状化現象が発生したことがよくわかります。

伊能家旧宅の位置は、液状化被害のあった地域の約1km南になります。



図-7 香取市の特徴的な被害

香取市内では、特に地盤の液状化により大きな被害を受けました。

地震直後は

地盤の液状化により、電柱が倒れて、架線に寄るかかる光景が随所に見られました。

道路の舗装版が左右から押されて持ち上がり、通行止めになった箇所です。液状化により地盤は横方向にも移動しました。最大3m近く動いた箇所もあります。



移動した地盤が舗装を押し上げ、通行不能に

図-10 液状化による被害



地盤の支持力が低下し、建物・電柱が傾く！

図-9 液状化による被害

マンホールは、噴き出した泥水に持ち上げられ、あちこちで浮き上がりました。泥水の比重は水よりも重いため、その浮力も大きなものになります。

地震直後の小野川です。伊能家旧宅より約1km下流で、川底が噴砂で隆起し、排水不能になりました。



川底が噴砂で隆起して、排水不能に！

図-12 液状化による被害



マンホールの浮き上がりが随所が発生！

図-11 液状化による被害

香取市は関東一の米の生産地ですが、水田も噴



図-13 重要伝統的建造物群保存地区

ここからは伊能家旧宅や県指定文化財など、重伝建地区の被災状況と今後の復旧状況についてご説明致します。先にご説明したとおり、地区内では80棟以上の歴史的建造物が被災しました。

砂で埋まり給排水施設が損壊して、甚大な被害を受けました。

市内の建物被害は約6000棟で、このうち半壊以上の被害を受けた建物の3分の2以上が液状化地域に集中しました。

ライフラインは、道路被害が約600箇所にのぼり、また、水道は約2万世帯が断水し、その解消まで37日間を要しました。下水道は排水管が砂で埋まり、約1800世帯に影響が出ました。

公共施設の被害総額は、現在把握している災害復旧費集計すると、200億円程度になります。

*

地震後に撮影された重伝建地区の航空写真です。

ブルーシートで屋根に応急措置を施した建物が数多く見受けられます。地区内の建物の大半が屋根瓦が落ちるなどの被害を受けました。

震災直後の平成23年4月5日、同じく重伝建地区が被災した自治体とともに、当時の文部科学大臣、財務大臣へ、重伝建地区の被災状況を報告するとともに、復興支援を要望しました。

重要伝統的建造物群保存地区の復興支援を要望



全国伝統的建造物群保存地区協議会構成市(萩市・下郷町・桜川市・川越市・香取市)

図-15 文部科学大臣へ要望(H23.4.5)



屋根瓦が落ち、ブルーシートで応急措置をした建物が多数みられる。

図-14 重要伝統的建造物群保存地区の被災状況

蔵のいずれもが、屋根と壁に損傷を受け、特に店舗は屋根瓦が落ち、また、書院は建物が傾くなど大きな被害を受けました。



図-16 伊能忠敬旧宅(国指定史跡)被災状況

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
店舗	屋根葺き替え 壁土塗り 鉄骨耐震補強	木工事 壁塗り(一部)	壁塗り(残り) 修理完了
書院	屋根解体 下屋解体 壁・床解体 修理方針策定	基礎工事 古材繕い 屋根葺き替え 壁塗り	建具工事 修理完了
土蔵	屋根葺き替え 壁土塗り 壁解体 屋根漆喰	壁塗り	修理完了

図-17 伊能忠敬旧宅の災害復旧工事スケジュール

書院は屋根、壁、床の解体まで実施したところですが、今年度は、基礎工事、屋根の葺き替え、壁塗り、古い柱や梁の補修を行います。来年度に建具工事を行い、修理が完了する予定です。



図-18 伊能忠敬旧宅の復旧状況「店舗」

店舗の復旧状況ですが、屋根の葺き替えと柱や梁の補強までが完了したところです。今年度は補強の際に解体した壁や床の復旧と壁塗りの一部を行い、来年度に残りの壁塗りなどを行い、修理が完了する予定です。

設置するとともに、学識者に意見を伺いながら、修理や耐震補強の方針を決定しました。

大きな被害を受けた店舗と書院は来年度中の修理完了を見込んでおり、土蔵については今年度中の完了を見込んでいます。



図-20 伊能忠敬旧宅の復旧状況



図-19 伊能忠敬旧宅の復旧状況

旧宅の土蔵は屋根の葺き替えまでが完了し、今年度は壁塗りを行い、修理が完了する予定です。

個人所有の県指定文化財11棟の修理は、個人負担が軽減されたことにより急ピッチで進められ、今年の3月までに全ての修理が概ね完了しました。

【震災直後】



【修理後】



県指定文化財は平成25年3月までに全ての修理が概ね完了。

図-22 千葉県指定有形文化財の復旧状況

県指定文化財もほとんどが、屋根瓦が落ちたり、壁が剥がれるなどの被害を受けました。震災前まで町並み案内施設として使用していた旧三菱銀行の建物は、耐震強度に不安があるため現在は閉館しています。



図-21 千葉県指定有形文化財の被災状況

手し、この2年間に修理を終えた伊能図を中心に、現在、伊能忠敬記念館で、企画展を開催しているところです。

今後、伊能家旧宅の災害復旧修理工事の完了後は、旧記念館の解体も含め、かつて旧宅敷地内にあった建物の復元を計画したいと考えています。今年のゴールデンウィークの観光入込客数はようやく震災前の水準に戻りました。歴史・文化を活かしたまちづくりは、復興の足掛かりとなるものです。今後ともご支援を、よろしくお願ひします。

(うい・せいいち 会員 特別顧問)



さわら雛舟 (平成25年4月)

ありがとうございました

◆企画展(期間 平成25年5月28日～7月21日)

- ・震災直後から、国宝伊能忠敬関係資料の修理に着手。
- ・2年間に修理を終えた伊能図を中心に一般公開。
- ・昭和20、40年代に実施した資料修理の取組みも紹介。



図-23 伊能忠敬の地図公開(伊能忠敬記念館)

伊能忠敬周辺の女性の手紙(二)

・小島一仁先生古文書講座の史料から・

加藤時男

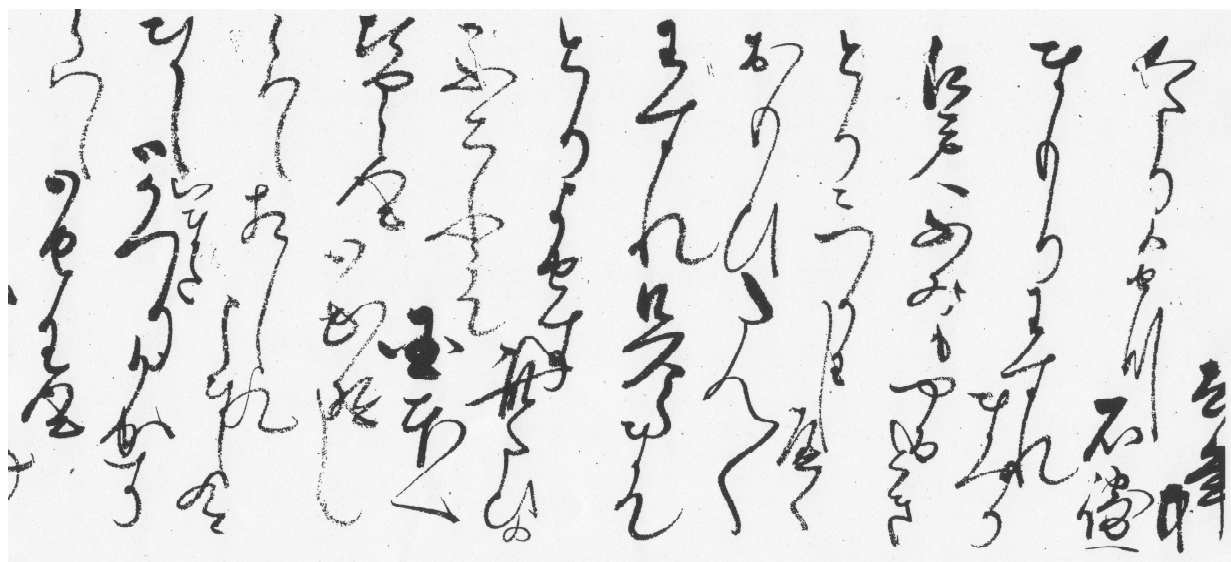
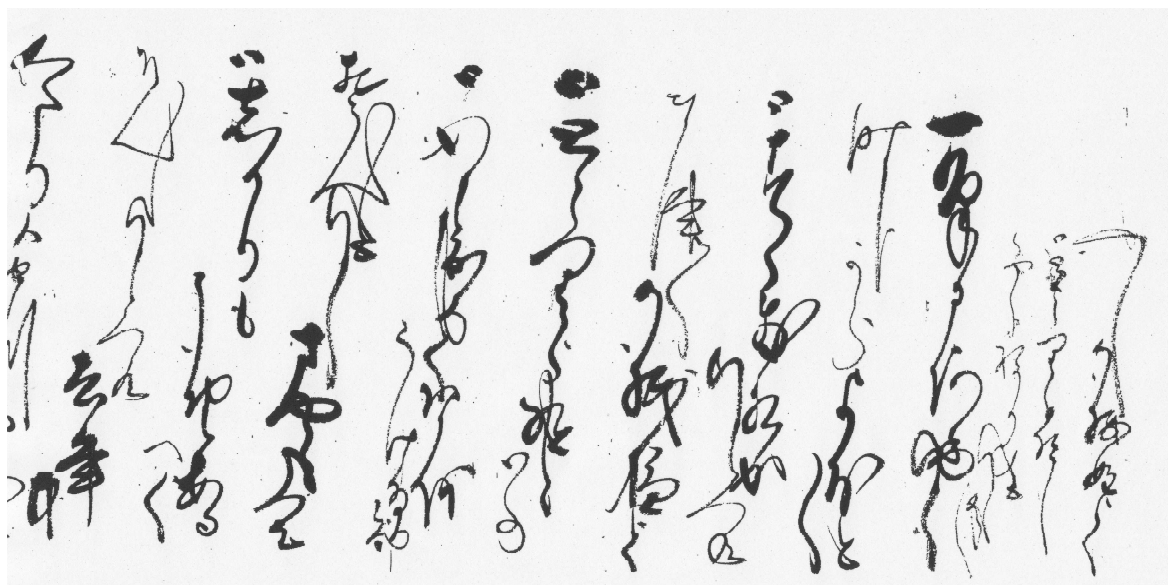
前回掲載された拙稿「伊能忠敬周辺の女性の手紙」に關し、佐原の当研究会々員Nさんから小島一仁先生の古文書講座について次のような御手紙をいただいた。即ち、小島先生の講座は、昭和四十九(一九七四)年に始まったとのことであり、現在も先生の遺志を継いで続いております、二〇一三年で三十九年になり、六月で四四五回とのことでした。実に驚異的であり、さすが「歴史と忠敬さんの町」佐原と感服致しました。

小島先生がテキストに採りあげられた女性の手紙には、伊能忠敬の妻「みち」娘「いね」や「たか」「ふさ」「はつ」など多くの女性達があつた。なかでも「たか」の手紙は五、六点あつた。ここでは「たか」の手紙を一点紹介する。

忠敬と「たか」をはじめ女性達との關係についても、小島先生の解説があつたと思われるが、解説を追うのが精一杯であり、当時の記録を紛失して判然としない。「たか」の手紙の宛名がそれぞれ、「いのふ御兄上」「御姉上」となっていることから、義妹と云うことになるうか。

また、男性の手紙であるが、参考として加瀬脩助の手紙も一点紹介する。脩助は太田村(旭市)の人、忠敬の娘であり「いね」の妹である「しの」の夫である。「たか」の手紙の中にも「修助事」とあり、「たか」が修助の母と推測されるからである。なお、この手紙には「しの」(妙融)死去のことが記されており、天明八(一七八八)年頃の手紙と思われる。宛名は「伊能御姉様」となっているので、

① 「しの」の姉「いね」のことであろう。
たかの手紙



Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, arranged in vertical columns. The characters are fluid and connected, typical of the Edo or Meiji periods. The text is written on a light-colored background.

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, arranged in vertical columns. The characters are fluid and connected, typical of the Edo or Meiji periods. The text is written on a light-colored background.

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, arranged in vertical columns. The characters are fluid and connected, typical of the Edo or Meiji periods. The text is written on a light-colored background.



尚御機嫌よく
御とうりう遊し
候やうねかひ上まいらせ候

かしこ

一筆申あけまいらせ候

時分からよほと

御す、敷相成まいらせ候へ共

まつ、御機嫌よく

御とうりう御坐候御事

御めて度かしく、なをうけ給り候而

そんしまいらせ候、さやうに候へ者

御しかりも御坐あるへく

そんしまいらせ候へ共去年中

くたり候せつ石崎へ

まもりわすれまへり

江戸へふみもやるとき

とつ二つかわしへく

おもひたん

わすれ只今まで

とりよせす此たひの

御ふこうにて国本へ

皆々さま御出遊し

候て相しれ申ましく候

まゝいまた御かへり被成す

候ハ、御せわさま申かね

まいらせ候へ共とうそ

御まへさま御出のせつ

さやう仰られ御とりよせ

被下へくひとへに

ねかひ上まいらせ候、あまり

なをさり二致おき

御しかりも御坐あるへく

そんしまいらせ候へ共せひなく

御ねかひ上まいらせ候、おせわさま

なからひとへに

ねかひ上まいらせ候、つきに修助事
江戸おもてへのほり
おり候まゝたしか

御まへさま二御めにかゝり

候よしとふそ

御ねかひ上候まゝ御くたりのせつ

さはらへ御まわし

被下候やうくれ

ねかひ上まいらせ候、私

ふみをも遣し申さす

候まゝ御あひ被成

候せつよろしく

仰られ被下へく候、私も

ふみ遣し候もきのとく二

そんしまいらせ候まゝ御まへさま

よろしく仰られ被下へく候

御まへさまいつしふん

の御くたり二候やうけ給り度

そんしまいらせ候、私事も

すいふん、そく才二

くらしまいらせ候まゝはかり

なから御心安く思しめし

被下へく候、こゝ元

皆々そく才二くらしまいらせ候

御心安く思しめし被下へく候

かのふや御夫婦へ

御ふみつかわし

申さす候まゝよろしく

御ふみ二て御たのみ

申あけまいらせ候、この度御姉様二も

御上り被成候ハんと存まいらせ候

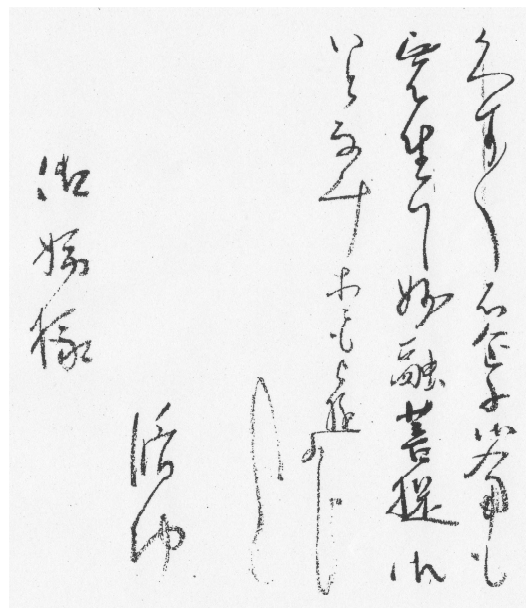
御序のせつよろしく

仰られ被下へく候

いそきあらゝめて度かしこ

いのふ

先達而内々御はなし被下候
吟奥許金子之義お高
御地へとう留二遣候せつもたせ
上ケ申積二而御座候所不慮之
大変二而先もじ御かゑりの
せつも御座候へども取紛御咄も
不申上候、此度右金子七両式分
さし上申候まゝ左様思召可被下候
猶又此義二付候而ハ妙融在世の
時内々承り候ところ右金子
外様二而御才かく遊し
許御とり遊し候様二承りまいらせ候
間此金子二而其方へ御かへし
可被下候、妙融存生の中
右金子私^る上ケ候事承り
ことの外よろこび候事ニ
御ざ候まゝ何レニも右金子ハ
私方^る上ケ不申候而ハ御前様へ
御やくそくの義理もかけ又者
妙融魂魄江もはぢ入候事



ゆへ右金子ハいくゑにも御受取
被遊御かゑし被下候義御無用ニ
存上まいらせ候、御受納
不被下候而ハ甚私心中相濟
不申候間、何とぞ御受納可被下候
一妙融事ハ段々思合候所
誠ニ命数のつくるところと
存上まいらせ候、お前様ニも
御明らめ遊しとかく
御ほよふ専一ニ存上まいらせ候
此上ハたゞ末ながく誠の
御兄弟とも思めし御心安
被遊被下候よふこれのミ願候
事ニ御座候、両親も
只今ニ而ハ此事のミ相ねがい
申くらしをりまいらせ候
用事計りあらゝ
申残まいらせ候
加瀬脩助

伊能

御姉様

人々御申上

かへすゝ右金子御入用も
無御座候ハ、妙融菩提御
いとなみ等ニも被遊可被下候

かしこ

脩助

御姉様

日本水準原点（国会議事堂前庭）

伊能 洋氏 描画

2013 年度総会（6 月 9 日）開会前に、星埜前
代表と新沢理事の案内で、霞が関ビル近くの
日本水準原点の見学会が開かれ 10 数人が参
加しました。



史料解説

高橋（景保）御用日記（四）

安藤由紀子

（解説）伊能忠敬記念館所蔵の高橋御用日記

は文化二・三年の第五次測量中の幕府天文方として伊能測量を指揮した景保の記録で、幕府内における第五次測量の赤裸々な記録として価値がある。

この史料がなぜ伊能家に伝存し伊能忠敬記念館に寄贈されたかはよく分からない。故安藤由紀子氏は研究会発足以前に解説しており、発足後、渡辺に史料として渡され、『伊能測量隊まかりとおる』執筆の参考に使わせていただいた。

基本史料の一つとして、あらためて見直すと安藤氏も結構読み飛ばしており、穴埋めに伊藤栄子さんの協力をいただいている。

淡黄色は景保の記述、薄墨色の背景部分は景保の引用部分、その他は解説である。（渡辺一郎）

九月廿二日（文化二年）

一、吉田氏今日被致登城候二付 金助出勤御届ヶ之義相頼候二付 於御城松之亟江其段申聞候処 撰津守殿御忌中御入込二候間 内々拙者心得居 御出勤次第可申上旨松之亟申聞候由

六八号で下役市野金助の出勤までの経緯を記したが、その届けを天文方同僚の吉田（勇太郎か）に頼んでいる。城中で奥祐筆の秋山松之亟に聞いたら堀田撰津守は忌中なので、出勤次第秋山から申し上げると引き受けて貰った。

同廿九日

一、登城 勘解由御用先江書状差出ス 是ハ去廿一日曉 坂部貞兵衛妻女子出産二付 其段申遣ス此壹封御勘定前田平右衛門江相渡 此状ハ城州伏見江遣候事御勘定所江之添状例之通

副隊長坂部に女子が誕生。御用状で知らせる。江戸からの書状は勘定所に持参し、御勘定（旗本）に渡すのだから手続きは大変。

十月朔日

一、今日洪川氏被致登城候節御勘定所より左之書付自分江相達呉候様相頼候由 尤一兩日中可致返答旨序ながら書中を以洪川氏より被相達候事

この書状は、勘定所から高橋作左衛門手附下役の市野金助の高、扶持を問い合わせる書状だった。形どおり返書が出された。

同三日

一、石原庄三郎（天津御郡代）より御用状相達す添状左之通

添え状は省略。左の返書を手附の中島長三郎、田中忠右衛門から差し出す。

御手紙致拝見候 然ハ測量御用先大津宿伊能勘解由より之御用状壹封 昨夜御到来二付御届被下 慥ニ致落手候 右貴報如斯御座候 以上

十月四日

右勘解由より差越候書状ハ 先達而此方より人増之儀可相成ハ四五人と被仰越候へ共 今六人も相

増大手分二而相測候ハ、大二早く相済 病人も出来

致間敷候 此間被仰越候趣二而ハ 四五人相増三手二分ケ一手休番ニて地図仕立させ二手二而測量可有之趣、左候へハ西国早く相済候儀は有之間敷旨上江之申立も無之間 六人も相願候方可然候

若願不相叶候ハ、無致方中国筋不残相済候上一先帰府致方可宜段申遣候処 承知之趣二而候へ共大手分之儀ハ別手之頭取無之 貞兵衛申談候処是又勘解由と長く相別れ弟子共支配致候義難出来相断候由二而 何茂大手分之義は不承知之由 且

又若願不相叶候ハ、中国相済次第帰府之義 是ハ一統承知之由 於勘解由も兼而相望処之由申来東嶋平橋（鍋島家来）儀は象限儀をも所持致居候へハ 増人人数へ相加大手分之節一手へ遣し候へハ極高も測量相成候間可相成や之段申遣候

平橋ハ兼々西国御用罷越度段申居候故也 右之者ハ虚弱なる者二而 殊ニ測量も不熟二候 且大手分も相止候ハ、象限儀も不用二候間右之者ハ用捨致呉候様申来ル

一、人増之儀 五郎兵衛共段々及相談候処 第一可差遣者も無之縱令罷越度申候者幾人も有之候へ共測量之儀不熟 其上虚弱或筆算等未熟之者而已二而 相応之者無之

縱令此方二而此者は宜敷と存遣候而も或ハ勘解由之心二かなわす 或存外御用先二而不用立者有之候節は何角心労も可有之 且又人増願之節願書ニ当春申上候趣二而ハ 三十三ヶ月程相掛り候ハ、不残相済 可申段申上候処

西国ハ東国と違 存外屈曲多く御座候二付 既ニ大坂迄ハ当五月頃ニハ可罷越奉存候之処 八月下旬ニ相成半分も見込とハ相違仕候 右之通二而 不残相済候義ハ 当春申上候一倍

も相懸り可申

左候へハ罷越候者共病人も出来可仕 既二下役市野金助義 於紀州路難所病氣相參帰府仕候へハ四国九州辺ハ別而風土相変候間 病人も出来可仕 是而已勘解由義心勞仕罷在候

右二付可罷成御儀二御座候ハ、私弟子共之内 今六人御増被下差遣し申度奉存候 病氣之者も少々可有御座且年数も凡明後卯年中二ハ相済可申哉と奉存候間 此段奉願

此振合ニ何茂難所昼夜骨折候事共委細相認 右も豫振合ニ而可申上候へハ 若奉願候上 人増出来ニても若明後年中二も出来兼候ハ、上江之申分もなく且又当春願之節勘解由内弟子共ハ国元江引込 或ハ養子 或ハ家督相統ニ而四人ならてハ無之段申上候へハ今私弟子遣度と申候而は 夫なれハ当春手附之者不遣其方弟子を遣スへかりしをと 上の思召も如何二候へハ内々秋山江罷越右之委細相談 且秋山之言語之臨機応変ニ而 人増願候而も宜様ニ松之亟申候ハ、増人可奉願と懇談之処

今日勘解由方より大手分不承知 且中国仕廻次第一先帰府之方宜敷段何も同意之由申来候二付 弥人増は可相止 五郎兵衛并自分共存寄也 何れ秋山之存寄ニ從ひ可申と 桑原隆朝杯も申聞候二付 今七ッ時頃より 五郎兵衛同道ニ而秋山へ罷越 右之次第委細申談候処

松之亟申聞候は右之義先日よりも此方ニ而も相考候処 何レ中国不殘相済候ハ、一先帰府いたし勘解由之氣ニ入候者を見立又候罷越候方可然存候 貴公方ニも其思召二候ハ、先内々撰津守殿江右之段伺見可申候 尤上之御賢慮ニ而人を増可遣と可被仰事も難斗候 左候へハ人増相願可申方可然何レ伺之上此方より否可申進段 松之亟被申聞候

委細ハ難述草紙故略之

伊能の手紙の要旨を述べ、自分の意見を要約し、大増員は難しいから一度帰つて体制を立て直す案を考える。桑原の意見も聞いてから、間と奥祐筆の秋山を訪問し詳細に相談する。秋山も一時帰府に賛成したので、堀田撰津守に伺つてもらうよう依頼する。

この件からみると、奥祐筆組頭は役料二百俵の身分はあまり高くない旗本ながら、若年寄、老中らを補佐する政策秘書のような役割を果たしていたことがわかる。

同十一日

一、此間秋山江申入置候勘解由西国御用増人之儀撰津守殿江伺具候哉之段 今夕方松之亟宅江問合旁罷越候処 松之亟申聞候ハ

此間五郎兵衛と御同道ニ而御談有之候義 委細撰津守殿江申上候処 御尤思召ニ而何レ其口上之趣書取同書可差出旨被仰候 尤其上ニ而評議之仕方も可有之段 御達之由なり 尤撰津守殿思召ニ而ハ人増ニ致四国九州共一時ニ為相廻度被思召由なれとも 多分中帰リニ可相成段 松之亟内々被申聞候松之亟存寄ニ而ハ 中帰リ之方可然趣なり

頃合いをみて、堀田撰津守への伺いをお願いしていた奥祐筆宅へ夜分間い合わせに出る。

詳細を撰津守に申し上げたところ、書面にして差し出すように指示があったと伝えられる。其のうでで相談することになったとのこと。

撰津守としては増員して一気に済ませた方がいいという判断だが、秋山の意見では、多分一旦

引き揚げることになるだろうといわれる。

同十三日

一、御用先伏見より九月晦日出二而 御用状到来伏見奉行加納遠江守より達ス 但用人より添手紙来坂部貞兵衛より伏見より先々江遣し候先触写差越ス

覚

御証文

一、 人足 七人

同

一、馬 六疋

同

一、長持壺持人足

右者我等共国々海辺為測量御用、来ル晦日夕内弟子共上下拾五人伏見出立、下鳥養より測量相始メ、神崎川通り尼ヶ崎江向ひ、夫より撰州、播州、備前、備中、備後、安芸国広島迄、右国々並に瀬戸内之島々共不殘相測候間、御証文之通書面之人馬無遲滞継立可被申候 尤瀬戸内之島々江者渡勝手宜敷所より致案内、船用意可有之候 且讃州、予州持之島ニ而も、中国筋島繞キニ而測量都合宜敷所ハ此度相測候間 其最寄より讃州、予州之島々江兼而申通置、渡船其外止宿等差支無之様 尤右通行筋山川共致測量候間、村々案内可有之候

一、泊宿之儀者雨天其外逗留之儀も有之候間、途中より追々可達候 尤御測器据込候間、明キ地十坪計リ之地所用意可有之候 泊り宿ニ而夜分致測量候間、可成丈ケ上下不殘同宿之積り用意有之、村方建家間狭ニ而同宿難成儀も候ハ、近辺江別宿用意可有之候 且支度之儀ハ御定之木銭米代相払候間、其所有合之品ニ而一汁一菜之外馳走ケ間敷儀、決而可為無用候 則御証文

写四通差遣候 此先触早々致順達、芸州広島江留置我等着之節可被相返候 勿論広島より先之儀者、同所より先触差出可申候

丑 九月

下河辺政五郎 印

坂部貞兵衛 印

高橋 善助 印

伊能勘解由 印

伏見より

鳥養下ノ村

神崎川通り

摂州尼ヶ崎

夫より

播磨

備前

備中

備後

安芸

広島迄

右国々

海辺

浦々

島々

問屋

年寄

名主

組頭

中

追而江州より越前若狭通り北海辺相測り可申処、寒氣ノ中此測量難相成趣二付、 摂州より播州路

山陽道国々相廻候段、 先達而山陰道通り長州赤間より芸州迄触書差出置候間、 右触書と此触書と出会候共、此触書ハ芸州広島迄相達し、山陰道通り相廻り候触書ハ出会之処二留置、我等通行之節相返し可被申候 以上

測量隊は山陰測量をあきらめ、山陽道に向かつて出発。その先触れ写が報告されてきた。

なかを見ると、山陰道は行かないという通達が、山陰、赤間関（下関）經由広島まで出ており、この年は広島まで行く予定だったことがわかる。実際には岡山で越年した。

文中に四国領でも都合がいい場所は一緒に測るから案内せよ、と出てくるから、測量順序は、地元が或る程度意見を出したことが分かる。

この先触れは忠敬の先触れであるが、他にお証文写し四通とある。老中・勘定奉行の御証文が入っているだろう。受け入れ側史料では大抵一番偉い老中の証文が先に出てくる。これら添付文書が先触れの威力をバックアップしていた。

同十五日

一、吉田氏今日登城に付、中帰り伺書持参呉候様 相頼 尤自分可遣処 面部腫物発し難出故 吉田氏江相頼 即伺書左之通

書面伊能勘解由儀中国測量相済候上一旦帰府為仕度段奉伺候通被 仰渡 奉畏候

十月廿六日

高橋作左衛門

折掛無之一通物

私手附伊能勘解由義西国為測量御用罷越候処 難所多く果取兼候二付 中国筋測量相済候上 中帰り為仕度奉伺候書付

十月廿六日

高橋作左衛門

私手附伊能勘解由儀 西国筋為測量御用 当二月江戸出立仕 東海道筋并今切入海 夫より勢州桑名江出 勢州志州并小嶋共測量仕 当六月中旬紀州熊野浦江取掛り候処以之外大難所二而存外日数相掛り候内附添罷越候者共 山海之氣并暑熱二相感し追々病人出来仕候趣其頃申越候

当七月下旬漸ク熊野浦測量相済 同国并泉州西面海辺小嶋共相測り大坂江出淀川筋京都より江州湖水江罷越 九月下旬右湖水不残測量相済申候 夫より若狭路江罷越可申候 冬二向ひ難所需多ク御座候上隠岐渡海も難相成趣二付 引返シ宇治川筋より摂津尼ヶ崎辺迄此節罷越 測量相済 此節より播州江向ひ 中国筋南面海辺江罷越可申積り二御座候

前文申上候通 勘解由儀熊野浦辺二罷在候頃より追々申越候は 紀州熊野浦之義は兼々難所之様子二承り及罷越候之処 存外広大難所言語を絶し且又追々承合候 中国筋四国九州等之海辺ハ広大難所并嶋々多ク御座候由 僅之熊野浦さへ日数一倍も最初之見込と相違仕候二付 附添之者何茂先キタ限りも無御座様二相心得 自ラ気力も相緩ミ病人出来仕候儀二も可有御座哉二奉存候

此上ハ増人五六人茂相願手配り仕候ハ、御用済も果取可申哉之段 差添罷越候もの共江申聞候 当時其儀を力ニ仕何茂骨折昼夜出精仕 少々之病氣等をも不相厭楽々相励 御用相勤罷在候

尤右之通難所多く御座候二付最初積立之日数相違仕奉恐入 其当惑仕罷在候間 何分勘弁仕吳候様私迄度々申越候 右之通勘解由儀不得止事申越候儀二付増人可奉願哉と奉存 御用立可申者相調候処 一兩人ならては無御座候二付 増人難奉願 依之色々勘弁仕候処たとひ御吟味御座候而 人数有之被差遣候共多人数二罷成勘解由差配二当惑仕候而は 却而手続見込と相違仕 果取兼候義も難斗奉存候 必竟是迄病人出来候儀は手元之難所二当惑仕候上 前文勘解由より申越候通り 先々広大難所之儀追々承知仕行先二見切無御座候故 果しも無之様二奉存 自ラ氣力たゆみ 病人も出来候儀二可有御座奉存候二付 此上は中国海辺嶋々并隠岐等測量相済候上

一 先帰府仕地圖等相調 其上二而再二四国九州壱岐 対馬江罷越候様仕度奉存候

右之通二段二仕 先此度は中国筋 隠岐限二而帰府二相成候へは向二見切御座候故 何茂氣力を相増別而出精仕 自ラ病人も希二相成可申哉二奉存候尤右之通中国筋 隠岐限二相成候而も 来寅年中二は難相済 翌卯年二も相残可申奉存候 依之 先此度は中国筋并隠岐迄相測一端帰府仕候様仕度奉存此段奉伺候以上

丑

十月

高橋作左衛門

右伺書十五日御礼之節 吉田氏御城江持参秋山松之亟を以 撰津守殿江上ル 尤昨十四日秋山江内々為見候所 随分宜敷段申聞候二付 今日上ヶ候事

引用部分は撰津守の指示で提出した伺い書である。初めの部分の右下に「・・被 渡仰 奉畏

候」とある文言は「奉り附」といい、決裁後、願いの通り仰せ渡され承知いたしましたと伺書に付記して差し出したらしい。記録は伺書と二通り書くのは面倒なので書き込んだのである。

同十六日

一、御用先攝州尼ヶ崎より去ル四日附之御用状到来城主松平遠江守より遣ス

高橋作左衛門様

松平遠江守内

家木長右衛門

藤田 東吉

以切紙啓上仕候 然ハ測量御用之衆方当月二日在所表江御越城下二被成御止宿候 其節御壱封被差越御口急キにも無御座候間 領主便之節御届申上候様被仰聞御渡二成候由にて 在所役人共より差越申候間 早々御届申上候

御落手被成可被下候 此段宜敷申上候様 遣伝簡申付候条 如斯御座候 以上

十月十六日

右返書不遣 下役より請取書遣ス

同十八日

一、御用先江書状差出ス 今朝吉田氏登城有之二付相頼候処 御勘定組頭保田定市江 被相渡候由 今便ハ此の間撰津守殿江差上候伺書写 勘解由之差遣ス

同廿六日

一 秋山より左之通申越ス

高橋作左衛門殿

御本丸

奥御右筆中

高橋作左衛門様

秋山松之亟

弥御安全被成御座奉賀候 然ハ

別紙書付 伺之通御奉り附被成御

差出被成候様 堀撰津守殿被仰聞候

間 則書付差進候 御奉り附被成

御差出可被成候 以上

十月廿六日

右手紙へ 去ル十五日吉田氏ヲ以上ヶ候勘解由中帰リ伺書添来 則奉り附いたし 左之返事相認返上呉候様頼遣ス 但し奉り附写は十五日差上候伺書江附認置

御本丸

奥御右筆中

高橋作左衛門

秋山松之亟様

御答

高橋作左衛門

御剪紙拝見仕候 寒冷相増候

得共 益御壮健被遊御座奉狂

喜候 然ハ別紙書付 伺之通被仰

渡候間 奉り附仕 返上可仕旨撰津守殿

被仰渡候段承知仕 即奉り附

仕 差上申候 宜敷御執斗奉頼候

右貴答申上度 如此御座候 以上

十月廿六日

右手紙別紙 明廿七日御城江持参仕差上可申之
処此間より風邪二而長髪二罷在候二付 乍略義御
使江相渡申候 可然頼入候段申遣ス

十一月朔日

一、登城 勘解由方江御用状出ス 此間被仰渡候中
歸り之義 左之通申遣ス

以飛札申達候 然は兼々及御掛合候当御用之儀
兎角果取兼候間中国筋 隠岐并小嶋共測量相済候上
一端帰府有之地図等取調其上二而 再四国 九州江
可被相越候様致度段 別紙之通亥十五日伺置候処
今廿六日伺之通 中国筋不残測量相済候上 一先帰
府可致旨 撰津守殿被仰渡候 依之申達候 可被得
其意候 以上

十月廿六日

伊能勘解由殿

高橋作左衛門

右御用状備前岡山江出ス 尤御勘定横山太郎右衛
門江相渡ス

右書中別紙と有之ハ伺書写 先達而勘解由江遣し置
候写 此度遣し候積り也

一、御勘定前田平右衛門江面会 勘ヶ由儀中帰り伺
之通被仰渡候段通し候処 委細承知二而 何レ右達
書可差出旨申聞候

勘定所役人はすでに承知していた。

同三日

今朝吉田氏登城二付此間前田平右衛門江談置候仲
歸り被仰渡候段御勘定所江之達書左之通相認頼ム

手附伊能勘解由儀西国筋海辺為測量御用罷越候処
西国筋以の外難所多果□兼候二付中国筋並隠岐測量
測量相済候上 一増致帰府地図など取調候上 再ビ
四国九州江罷越可申旨伺之通被仰渡・（折り目）・
相済中間敷 夫より一年茂地図取調二相掛 再ビ四
国九州江罷越候は 辰年頃にも可相成哉に奉存候
此段為御心得御達申候 以上

十一月三日

御勘定所

高橋作左衛門

右書付吉田氏より定市へ直に相渡し候事

同五日 御用先姫路から十月十七日に出した書状
が酒井雅楽頭家中經由で届く。（内容・添状の記録無）
同十二日 十月廿九日に赤穂からの書状が森和泉
守家中經由で届く。（添え状のみで内容の記録無）

同十五日 月次御礼登城

一、御右筆仲沢達之助会度旨申越候二付 影土圭江
相廻り面会致候処 先達而願置候市野金助西国為御
用罷越候諸雜用請取過之分返納方 願之通被仰渡候
間 左之通承り付可致旨申聞左之書付達之助相渡候

残金十八兩上納為仕 残金銀并旅御扶持方は
来寅年より十ヶ年賦上納可仕候事

右二付速刻左之通承り附致し同人を以返上

書面残金十八兩上納為仕残金銀并旅御扶持方は
来寅年より十ヶ年賦上納可仕旨奉願候通

被仰渡 奉畏候

十一月十五日

高橋作左衛門

猶又達之助江承り合候は 右被仰渡候二付撰津守
殿江御礼罷出可申哉之段 問合候処不相知 松之丞
仕承合呉候処 自分并金助共二撰津守殿江御礼二ハ
不及候段申聞候

一、右二付御金蔵掛り御勘定鶴殿三郎九郎江面談
金助西国筋より病氣二付罷帰り候間 諸雜用御手当
金銀并旅御扶持方等請取過二相成有之候 右之内只
今返納相成候金十八兩致返納 残金銀并旅御扶持方
ハ 来寅年より十ヶ年賦上納可致旨 被仰渡候 右
返納方之儀 拙者より返納可致や当人より返納可為
致や之段承り候処

最初請取候節 御手前之御手形二而御請取候ハ、
御手前様手形二而返納可致旨申聞候 右二付近日
案文相認右三郎九郎江可遣答也 旅御扶持方ハ当
年返納無之ニ付不談

同十六日

一、今朝金助呼出し左之通申渡書相渡ス

市野金助

右病氣二付西国筋御用半途二而帰府候間 御手当
諸雜用并旅御扶持方等請取過二相成有之候 右残金
十八兩此節致上納 残金銀并旅御扶持方は来寅年より
十ヶ年賦可致上納旨 頼之通撰津守様被仰渡候 依
之申達候

（あとがき）ここまで眺めてきて、安藤氏の解
読は拾い読みであることが分かった。以後は面白
い部分のみを紹介することにする。今回も伊藤栄
子さんに御世話になった。ありがとうございまし
た。

伊能忠敬 周辺の人②

高橋作左衛門景保 前田幸子



はじめに

高橋景保は伊能忠敬とは公私にわたって密接な関係にあり、かつ伊能図の成立について多大な功績があった人物である。しかし景保といえば「シボルト事件で獄死した」という印象が強烈であるためか、その業績や人物像はいまひとつ明確ではないように思われる。幸い、景保に関しては当研究会が蓄積してきた研究成果をはじめ『高橋景保の研究』などの専門書、江戸時代に書かれた書物、また景保自身の著作も多く残されている。今回、これらの資料にあたってみたところ、予想以上に具体的な景保の姿が見えてきた。景保の人生を辿りながら、その人物像に迫ってみたい。

少年時代

高橋景保は天明五年（一七八五）、大坂城京橋口定番同心・高橋至時の長男として大坂に生まれた。京橋組同心屋敷は現在の大阪市中央区法円坂一、二付近（大阪城の南側、難波宮跡公園を含む一帯）にあったので、そこで成長したと思われる。兄弟は二歳下の弟景佑のほか三人の妹がいた。高橋家の俸禄は先祖書に「現米拾石三人扶持」とあり、一石〓二・五俵とすると二五俵三人扶持という微禄であった。下級武士の常として内職をしたり組屋敷の庭で野菜を作ったりしていたと思われるが、高橋家には庭に大きな柿の木があり、この実を売って家計の足しにしていた。この大切な柿の木を

母・志勉（シメ）が至時の勉学の妨げになるとして独断で伐らせた逸話が残っている（会報第20号・34号）。この話はシメの賢夫人ぶりを示すものとして知られているが、シメの豪胆な性格をも表わしているといえるだろう。

寛政七年（一七九五）、高橋家は激動の年であった。三月に父至時（32）に天文方へ出仕の命が下り、翌四月に出府。その半年後の十月十一日には母シメ（28）が死去した。父の出府後は景保（11）が少年ながら父の代理を務めた。翌年、景保が父の師である麻田剛立のもとを訪れた際にも一人前に遇せられ、「作助様に例の通りお酌いたし、お酒差し上げました」という剛立の至時宛書簡が残されているという（会報第31号）。この逸話は景保が十二歳にしてすでに酒を嗜む習慣があったとも読めて興味深い。景保自身の出府は寛政九年（一七七七）十二月四日、十三歳の時とみられている。

（※年齢は数え歳）

俊秀のほまれ

出府後、景保は景佑と共に天文観測に励むかわら昌平坂学問所で学んだ。『天文方代々記』には景保十七歳のとき、学問所素読御吟味で成績優秀に付、賞をうけたとの記録がある。「素読吟味」は寛政の改革で導入された試験で、林大学頭ら試験官の前で四書五経の指定箇所を高らかに音読するものである。景保が後年、若年寄堀田摂津守正敦やその上司である松平伊豆守信明から絶大な信頼を得るに至った発端はここにあるといわれる。堀田、松平は父・至時を天文方に抜擢した当事者であり、その息子である景保に対しても特別な期待を持っていたと思われる。景保の資質はその期待に大いにかなうものだったようだ。

役職と研究業績

文化元年（一八〇四）父至時（41）が没し、景保（20）がそのあとを継いで天文方に就任した。景保が若年のため間重富（48）が出府して補佐、学問・技術上の指導をし、職務を遜色なく遂行した。伊能測量の指揮監督は第五次測量から担当したが、幕府事業となったことに伴う当局との折衝や煩雑な事務手続も遺漏なく行い、忠敬の測地事業を円



【雅楽関係】

『噓音抄』四冊 雅楽の笙の楽譜を集大成した書。景保は雅楽にも造詣が深かった。

多趣味と別荘

景保は多くの趣味をもち、私生活も多忙であった。その第一は雅楽である。平戸藩主・松浦静山が景保に笙を習っていたことが『甲子夜話』にみえており、殿様に教えるほどの技量だったことがわかる。司天台の役宅が火災になったあと、景保は忠敬に京都で雅楽用の太鼓を買って来てくれるよう依頼しており（会報第33号）、危急の際にも雅楽はなくてはならぬものだったようだ。著書『噓音抄』は「正に雅楽学史の一端を担うもの」（『高橋景保の研究』）というほどの水準であるという。演奏技術だけでもその域に達するまでには多くの時間と努力を要したはずだが、学問的にも追究せずにはいらなかったようだ。

また 景保は風光明媚で知られる隅田川畔の白髭神社の隣地に若年（26）の頃から別荘を持つており、ここに友人を集めてしばしば漢詩の会などを催していた。この別荘があるとき台風で壊れ、その修理費を無心する妙薫あての手紙が残っている。別荘は禄高百俵の身分（※至時の天文方昇進以降は「高百俵五人扶持」には不相応な贅沢であり、自力では維持できなかったのである。景保には虚栄的・奢侈的性癖があり、これはその一つの例であるといわれる。文学趣味のほか碁や拳の嗜みもあり、飲酒も含め友人らとの交流を大いに楽しんでいたようである。

大田南畝の詩

景保は大田南畝（蜀山人）とも交友があった。司天台の役宅に招いて度々酒宴を催していたようである。『南畝集』には景保に贈った漢詩が五首みえるがそのうちの二首を掲げる。

飲高橋氏（高橋氏に飲す）

浅草河辺酒未醒 浅草河辺酒未だ醒めず

司天台畔客猶停 司天台畔客猶ほ停まる

一庭風雨連斜照 一庭の風雨斜照に連なる

応妬人間聚德星 応に人間德星の聚まるを妬

むなるべし

※德星 瑞祥の兆として出る星。景星（＝瑞星）

（『南畝集』十六）

賀高橋氏（高橋氏を賀す）

已列司天監 已に司天監（※天文方）に列し

還兼中秘書 還た中秘書（※書物奉行）を兼ね

青雲自有路 青雲自ら路有り

不必由階除 必ずしも階除（※階段。順序）に

由らず （『南畝集』十八）

放蕩と病氣

景保において女性との交遊も盛んであったらしく、そのつけである淋病に景保は長く苦しんでいた。文化十年一月晦日付、景保（29）が忠敬にあてた赤裸々な手紙が残っている（会報第33号）。

『景保書簡』（前略）私は、先月二三日よりはことの外の疼痛で昼夜苦痛大きく、蘭法のドリュシスという強い薬をのんでいて、痛み

も次第に減ってきました。しかし膿汁は出ています。強い薬のせいか口の中が腐乱し、正月元日より五日までは絶食同様でおもゆをするのみ、この薬は止めました。しかし時々感熱往来、去る廿日よりは痔疾の痛みにて大いに悩みました。……漸く二八日に頭より上のみ上げられるようになりました。ご推察ください。」

司天台の不審火

淋病の手紙のひと月後の文化十年（一八一三）二月二三日の夜、司天台の役宅から火事が出た。火元は物置で原因不明の不審火であった。この知らせを受け、忠敬は妙薫に次のように書いた。（会報第33号）

『忠敬書簡』（前略）浅草高橋御役所ならびにご住居、其の外お預りの書物まで焼失のよし、手伝いの吉田栄六より知らせがありました。高橋氏はしばらく「差控え」と思われまします。高橋御役所は上の覚えもよく、ここへのみ御用仰せつけられ、他の御役所の妬みもあり、高橋氏の勢い強すぎるように聞いております。私信を出すごとに、恭、謙、讓、と言葉を謹、心を慎む、が大切と申し上げてきました。満れば欠けるの通りになって、大変残念です。……」

四人いた天文方の中で景保にばかり御用が集中するので他の方々の妬みがある……と暗に放火の可能性が示唆されている。高慢で奔放な景保の性格にも問題があるので忠敬は以前から忠告していた

のだが、直らなかつた。この火事で景保にとって最も痛かつたのは、六年以上苦勞して完成間近だった『満文輯韻』三十巻の原稿をすべて焼失したことであつた。

火事の後、景保は責任をとって弟景佑に譲り引退しようとしたが、堀田侯はじめ周囲のひきとめにより留任となつた。のみならず火事から一年後の二月三日には書物奉行・天文方兼帯となり、ますます重用されることとなつた。その背景にはゴロウニン事件等の国際情勢の緊迫があつた。海外情報に通じた景保の存在は他者に代えがたかつたのである。以後十数年間、景保は公務に執筆に多忙な日々を送つた。伊能測量の指揮監督もその一部であつた。

景保の逮捕

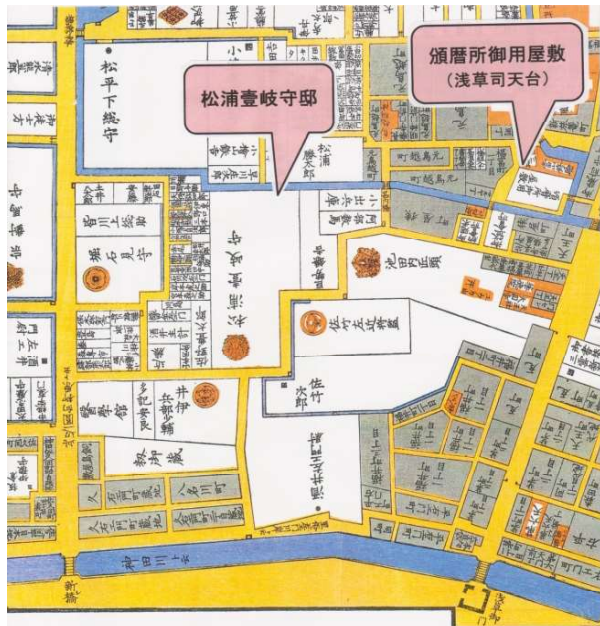
文政十一年（一八二八）十月十日夜、景保（44）は逮捕される。司天台の近所に住んでいた平戸藩主・松浦静山が、その時の様子を見た人からの聞き書きとして『甲子夜話』に書き留めている。

『甲子夜話』「十月の夜、天文台の屋鋪騒動」

「十月十日の夜、天文台の下高橋氏の屋鋪を、猿屋町の方と御蔵前の方より大勢囲みたり。夜陰のことゆゑ灯燈夥しく、其中には御紋の高張も見へしが、やがて高橋が屋鋪より、青網をかけたる駕を昇（かき）出たり。この駕を大勢にて警固して行きしと、そのあたりの町人共驚き出て見し者の話なり。この頃聞く。天文方高橋作左衛門、何か御尋のことありて、揚り坐鋪に入れられしと。彼駕は此人にや有けん。此人は、予嘗て笙を学びし人なれば、

罪はあるべけれど、不便（ふびん）にこそ覺ゆれ。いかなることを為しにや。頃日処々の取沙汰は種々なるが、実を聞ざれば記さず。」（『甲子夜話続篇』巻二十）

この逮捕は本人にも世間にとつても唐突であつた。景保は林蔵の届出後、身辺捜索が行われ始めたことに気付いており、呼出しを予測していたと言われる。しかし実際は「呼出し」ではなく「召捕り」という厳しい展開となつた。しかも『甲子夜話』によれば「通常、揚り坐鋪（※旗本が入る牢）に入る者には縄をかけることはないのだが、景保は縄付きで入つた」、「逮捕当夜から徹夜で尋問が行われ翌朝に及んだ」という極めて苛酷な異例の措置となつた。



獄中生活

景保が獄中から友人にあてて出した書簡が残つており、獄中の様子を次のように伝えている。

『北叟遺言』

「…右者去月十五日のたわ事、家内にも御見せ可被下、御笑草二入御覧候。今日は南至世にあらハ、例の碁の拳のと戦ひ廻る孟たのしミなるへきに、九尺式間にせはめられ、附人共五人口にて、昼夜厠のにほひをかき候。夜ハハツ九ツ迄もねむられず、真暗なる所に、おきてみつ寝てみつとこの寒サ哉にて候。御推察可被下候。別紙事家内へ御達可被下候。天の助を得候て拜眉可仕候。恐らくハ近藤（※近藤重蔵）の一例か。前厄のしりか出てきた後江厄 はてハ大家の御預となる 右至日幸便を得て上候。家内の事何分々々御心添偏奉願候。アア娑婆こひしやナア。

鈴木様（※後出・鈴木成恭） 入牢人保」

厠の臭いや寢床の寒さに閉口しながらも、景保の口調は余裕がありユーモアさえ感じられる。近藤重蔵のように大名御預りになる程度の判決を予想して樂觀的に構えていた様子が伝わってくる。しかし、事態は獄死という予想外の展開となる。

獄死と塩漬

文政十一年十月十日に逮捕された景保は、四か月後の翌十二年二月十六日早朝牢獄内で病死した。病名は不明である。慣例に従い、景保の遺骸は判決まで塩漬にして保存され、判決後斬罪に処された。

〔※塩漬けの詳細については国立公文書館のサイ
ト内「蠻蕪子」の項で参照することができる。〕



「高橋作左衛門死骸」(『蠻蕪子』)

景保の病死については当時から不審の念がもた
れていたようである。松浦静山は「虚実は知らず」
として以下のように記している。

『甲子夜話』〔作左衛門異国通路につき長崎の
文通〕「高橋云云。揚座敷に而大病、段々御手
当有り候得共、養生不叶死失。右に付、死躰
御改等厳敷仰付られ候得共、病死に相違無き
由。然処大切の囚人ゆへ、塩漬に相成、尤臍
腑を取出し塩漬相成候由。」(『甲子夜話続篇』
卷二十五)

判決―三つの罪状

景保の死亡から一年後の文政十三年(一八四二)
三月、評定所の判決申渡があった。その内容は以
下の通りである。罪状が三件あることに注目され
たい。

【高橋作左衛門への申渡書】

「文政十三寅年三月廿六日

御書物奉行 天文方兼帯 高橋作左衛門 四十六

地誌并蘭書和解御等之御用相勤罷在候二付、
御用立候書籍取出差上候ハ、御為筋二も可
相成与、兼而心懸候由者申立候得共、去ル戌
年江戸参府之阿蘭陀人シーホルト儀、魯西亜
人著述之書籍・阿蘭陀人属国之新図所持致候
趣、通詞吉雄忠次郎より及承、右書類手二入
和解致し差上度一図二存込、懸望致し候得共、
容易に不手放候間、忍候而度々旅宿江罷越、
懸意を結び候上、右書類交易之儀申談候処、
シーホルト儀、日本并蝦夷地宜図有之候ハ、
取替可申旨申聞、右地図異国江相渡候儀者
御禁製ニ可有之哉与ハ存候得共、右二か、ハ
リ珍書取り失ひ候も残念ニ存、下河辺林右衛
門江申付、先年御用ニ而仕立候測量之日本并
蝦夷之地図、地名等差略致し、新規に仕立さ
せ、(中略)右体不容易品阿蘭陀人江相渡、重
キ御国禁を冒候段不届之至、刺平日役所御
入用筋之儀、縦令私欲者無之候共、勝手向入
用与打込二遣払紛敷取計斗、其上身持不慎之
儀も有之、旁御旗本之身分ニ有之間敷儀、重々
不届之至ニ付、存命ニ候得者、死罪被 仰付
者也。

右之通可被 仰付者ニ候間、其趣を可存段、
一件之者共申渡之。」(傍線筆者)

景保の主たる罪状は阿蘭陀人に地図を渡して
「御国禁を冒した」ことであるが、それに加えて
「役所御入用の筋の儀」と「身持不慎之儀」が副

次的な罪状としてあげられている。この副次的な
二つの罪状の詳細は以下の通りである。

公金流用の罪

「役所御入用の筋の儀」とは、下河辺林右衛門
への申渡書によると、伊能勘解由死去後の地図会
所の運営費流用の件である。景保は地図会所停止
後も経費を返上せずに、天文屋敷内に私設した地
図役所の雇人の手当や食事等の経費として流用し
ていた。下河辺林右衛門は周知のとおり第五次測
量以降、測量と地図製作に携わってきた下役であ
るが、景保の行為を放置した不手際を問われた。

【下河辺林右衛門への申渡書】

「…毎月御勘定所より請取来候同人役所入用
之内、伊能勘々由預り之地図会所、同人死去
後相止、御手当等も減切相成、筆料之定式
相雇儀者無之、如何ニ付御断返可致処、地図
役所者作左衛門自分入用を以御役屋敷内江補
埋、右御用相勤候者共江手当食事等差出、其
外取賄融通流用致候間、別段御断申上候義者
事重キニ付、仕来之通居置候様申候共、作左
衛門勝手向入用与力打込二遣払紛敷取計故強而差留
可申処、無其儀…」

不身持の罪

「身持不慎之儀」とは、景保に「旗本の身分に
あるまじき」不品行があったという件である。申
渡書で具体的に言及されているのは一件のみであ
るが、他の資料に別の不品行の事例も記されてい
るので併せて紹介する。

○下河辺林右衛門の娘

林右衛門への申渡書によれば、景保（46）は下河辺林右衛門（52）の娘を妾同様に召使い、その見返りとしてまだ十三歳である下河辺の息子を十六歳と詐って手附に採用し扶持を取らせていた。また『高橋一件』（作者不詳）という本によれば、出入りの鳶の者の妻をも召使のように近付けていたという。

【下河辺林右衛門への申渡書】

…殊ニ娘迄作左衛門義妾同様召仕候儀与乍察、彼是申候ハ、勤向差障ニ可相成与存込候迎、不存分ニ致置、剽忒同苗庫吉儀筆算相応ニ致候迎、作左衛門存寄を以、見習勤相願候様申勸候共、幼年者ヲ十六歳之趣申立、見習勤ニ差出御扶持方頂戴致候儀共、作左衛門申合候儀者無之候得共、右始末御家人之身分有之間鋪義、旁不届ニ付…

『高橋一件』

…下河辺林右衛門が娘を妾の如く近づけ置き、林右衛門が子去五年僅に拾三歳なるを手附となし、御扶持を取らせ、又鳶の者（割注 測量御用書物・器等持退候人）妻をも召使の如く近付、身持不宜候。

さらに、『蠻蕪子』（作者不詳）という本には次の二つの不品行もあったと書かれている。

○永井甚左衛門の妻

永井甚左衛門（56）は周知のとおり坂部貞兵衛が病没したあと副隊長格で活躍した下役である。『蠻蕪子』によれば、永井は司天台の役宅（会報

第48号に見取図）に住んでいたが、景保がその妻に対して不義をもちかけ無体な振舞をするので妻を親類に預けて一人で暮らしていた。すると景保は次第に何となく機嫌が悪くなり、独り暮らしでは火の元も不用心だという理由で永井に出役御免を申し付けたというのである。

『蠻蕪子』「永井甚左衛門ハ御役の長屋ニ住みせしが、其妻ニ作左不義を申掛しが、妻は節を守りて従ハざりけり。其後もむたひ成事も有りければ、妻をは親類に預けて壱人住居にて勤めけり。次第二何となく墨附もあしく成りて、独住居にては火の元も慥ならずとて、出役御免を申付たり、是人も告たる成るへしと。」（傍線筆者）

（傍線注 『蠻蕪子』は景保を告発したのは永井甚左衛門および後出の柏木源兵衛であるとしている。呉秀三『シーボルト先生』にはシーボルト事件発覚の動機について、「日本地図の複写に従事した製図工某がある理由にて高橋と不仲になりて、高橋をその筋に告発した」「高橋方の製図工某―林右衛門か―の密告により露見に及びたり」などとする「部下密告説」数件の記載がある。）

○借金不返済

『蠻蕪子』によれば、景保はもと寛永寺の鐘撞で景保の手附となつた柏木源兵衛（別名・善次郎、傳衛門）なる者との間で金銭上の紛争をかかえていた。源兵衛は景保に上野妙教院からの借金を取次したが、景保が貸主に返済せず、催促にも応じないので困って告訴したという。

『蠻蕪子』「此説の評ニハ露頭の次第ハ、寛永寺の鐘撞柏木源兵衛と云もの伴氏の養子と成、伝衛門と改名し、作左が手附となり、上野妙教院の金を取次て高橋に借し置しが、金主の院主遷化により、一旦耳を揃へて返済し、又借返して進ずべしと云へ共、…いらへもせで居たりけれハ、…必死に右の催促をすれ共少しも揺かざりければ、是非に及ばず参政の内に高橋の事を告げたれば、右の次第也といふ。」

世間の景保像

景保の逮捕は世間を驚かせ、事件に関する風聞を盛り込んだ瓦版や落首、戯れ歌の類が多数出た。その中から『蠻蕪子』に掲載された図版付の「暫のつらね」が興味深いので紹介する。

【図版】「高」という紋所をつけた景保らしき人物が歌舞伎の「暫」の扮装で「つらね」（自己紹介の長台詞）を述べているという趣向の図である。題名が「子のとし顔にせ」であり、顔に「暫」お決まりの隈取をかいていないことから、この図は景保の似顔絵であると考えられる。

※注

子のとし 逮捕された文政十一年は子年であった。

万武 景保は蠻蕪（バンブー＝竹）と号していた。

地球一件 景保は蘭名をグロビウス（＝地球）と称した。

作者・板元名 吉雄忠次郎、下河辺林衛門、柏木傳衛門、永井甚左衛門ら事件関係者の実名を振った名である。

筒井座 南町奉行筒井伊賀守が景保を逮捕尋問した。



【図版】「暫の津ら祢」『蠻蕪子』



【囃子詞】

「暫のつらね」

「東夷南蛮北狄西戎の其国々
地面広しといへども、
まづハ五穀が不足にて、
とろめんどろふくれん、
羅紗らせ板や猩々緋、
ちりんぶてれんぶへるへとあん、
毛類の荒ものが沢山でも、
びだるひ足にハなるべからず、
(中略)

遠からんものハ音ニも聞け、
近くは寄て目ニも見よ、
誰だと思ふア、つづもるへ、
前(さき)の白川殿の御眼鏡にて、
日向国の住人、浅田先生の身内にて、
股肱耳目と呼ばれたる、
天文者流浪花の定番同心夜食のかたまり、
チット古イが当つもって四拾四歳、
放蕩無頼に名も高はし、
敵役の随一、
姪乱無双大欲心、
強飲太郎金好キという無敵もの、
お江戸八百八町に限らずどこ迄も、
隅から隅まで御愚口の程を、
偏ニこいねがひたてまつると、
ホ、敬白」

周囲の景保像

周辺の人々からみた景保はどのような人だったか。『高橋景保の研究』所載の人物評を掲げる。

○鈴木成恭(友人・元同僚・書物奉行)「故天文

方高橋作左衛門は大將にてもするとよき人なり。ある時、属吏と対談してありしが、其の人立つと予に向ひて、今こゝに居た野郎、古今の大べらぼう、五文にもならぬ奴だが、書物にかけて呑込のよきこと、中々余人の及ぶ所にあらずといひたり」

○ドウィフ(オランダ商館長)「その風貌は一見余り愛らしからざりしも、之と交友するに及んで、彼が才幹あり而かも正直にして温和なる人なるを知りたり。故に一八一四年に彼と一層親交を結び、一八一七年予が日本を去りし時にも、彼は予に対して友愛の誠意を表せられたり。其の温厚にして堅実なる人格は幕府の敬重する所となり、……」

○大槻玄幹(玄沢の子・磐溪の兄・景保の輩下)「高橋氏は父の業を継ぎ、伊能氏が日本測量地図の総裁として、又世界地誌の総裁をなすに至れば、通詞を始め蘭学者を手に属し、日官に預からざる『シヨメール』御用も其手に附て勤仕する様になりたり。此人学才は乏しけれども世事に長じて俗吏とよく相接し、敏達の人を手に属して公用を弁ぜしが故に、此学の大功あるに似たり」

○大槻如電(磐溪の子。景保没後の生まれ。明治以降に活躍した)「幕府の天文方なる高橋作左衛門は有為達観の士なり。夙(はや)くも時勢を洞見し外交事要これを長崎通詞の手のみに委ぬ可からず、江戸にて其事を処理する一局を置くべしと建議して天文台中新に蘭書翻訳の員を備へん事を請ひ、其許可を得て文化八年五月一局を創設す」

景保の家族

景保の家族については『蠻蕪子』に「蠻蕪子畧系」が載っており詳しい。妻は荒井平兵衛女、養女・御普請役ノ女、妻の法号は「□□（不詳）院殿操誉凌功貞頼大姉」という。俗名は不明である。

なお、『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録』（〇五八）に差出人が「高橋景保夫人カ」とされる書簡が二通収録されており、内容は「引移り御祝恵贈、御礼（文化一〇年一月妙薫宛）」（※役宅火災後の転居か。）、「ネコ一匹取寄せ願う（同宛カ）」というものである。

子は小太郎（景僕）、作次郎（景福）の二人の息子があつた。小太郎はすでに結婚していたらしく、辰太郎という子があつたが二歳で死去した。

封廻状によれば、長男の小太郎（25）については「父親に意見しなかつたのが不埒である」として、また二男の作次郎（19）については単に父親に連座して、二人とも遠嶋を仰せつかっている。遠嶋中の生活については全く記録がなく、天保十年（一八三九）には赦免の申渡しがなされた。この遠嶋は実際には執行されなかつたという説もある。

『封廻状』（長男 小太郎）「其方儀は何事も不存旨申立候得共、作左衛門右不届之始末も不心附、殊に身持等之儀は父之儀に候得ば、心附異見をも可申処、無其儀、畢竟等閑之心得方、不埒之至に付、父作左衛門存命に候はゞ、死罪可被仰付者に付、旁其方儀、遠嶋被仰付者也。」

『封廻状』（二男 作次郎）「父作左衛門儀、不届之品有之候に付、存命候はば、死罪可被仰付者に候。依之其方儀遠嶋申付之。」

景保の墓

上野の源空寺に忠敬・至時の墓と並んで景保の墓と頌徳碑が建っている。元来、幕府への遠慮から墓は作られていなかったが、景保の功績にいたく感激した大日本名墓誌編纂所の八木史郎氏が昭和十年に独力で資金を集めて建立したものという。



墓石は正面に「玉岡 高橋景保墓」と刻し、墓石の左後方に立つ頌徳碑には徳富蘇峰による題字「為天下先」、その下に漢文で経歴と業績を刻み、背面にはドイツ文でシーボルト著『日本』からの字句とその和訳、ならびに碑建立の趣旨を述べている。

【頌徳碑 シーボルト著『日本』からの字句】余が此海路の詳細なる形図と多少水路学的観察とを報ずることを得たるは、吾等の同行せる日本人の好意と下関の友人の援助、殊に余の忘れ得ざる援護者たる幕府天文方高橋作左衛門に感謝せざるを得ず。

——シーボルト——
長崎 小沢敏夫訳

景保と源空寺

松浦静山『甲子夜話』に景保と源空寺の逸話が記録されている。景保の宗教観が窺がえるのでここに紹介する。

『甲子夜話』【高橋作左衛門の仏事】

「一昨年のこととか、高橋作左衛門、父の年回とて、檀那寺浅草の源空寺「名霊光」を招く。霊光往（ゆく）に仏壇のやうすもなし。主人曰。御入辱く候。因て食膳は供養致し候が、御誦経は無縁に、と云。霊光あきれて、御口上は承候へども、仮令（たとひ）食膳はなくと、誦経さへ致し候はゞ、礼式は済候こと故、仏間へお通し候へと云へば、主人又種々云ふ。さ候はゞ、是より直に還り候べく、食膳は受候ことあるまじと、慍色して云ひければ、さらば迎（むか）へとて）父の位牌の在る所に導きける故、向を見るに、位牌の前に魚肉を供へたり。霊光、こゝにて彼是と云はんは然らじと思て、ほどほど誦経して早々退出しと。後この僧の語を聞し人、高橋が所行、もしや洋教に帰依かなど、訝り言へり。（以下略）」（『甲子夜話続篇』巻二十五）

父至時の年忌法要に源空寺の住職が出向いたが、景保は「食膳はお出しするが読経は不要だ」という。住職がむつとすると位牌のある所に通してくられたが、なんと位牌の前に魚肉を供えている。住職はあきれて読経を早々に済ませて退出した。この話を聞いた人は、さては景保はキリスト教に帰依したかと怪しんだという内容である。松浦静山は後段で「常に仏を信ぜぬ氣風故のことにて、深

き意もあらざるべし」と景保を擁護しているが、最後に「人は常の慎み第一たるべし」と締め括っている。景保の常日頃の態度が慎みに欠けていたということであろう。

おわりに

『高橋景保の研究』の著者上原久氏は「文化・文政期において、景保は蛮書和解御用を総裁し、書物奉行兼筆頭天文方として、新興科学面の最高責任者であった。ある意味では、幕府の学問を、林大学頭と共に二分する立場にあったということが出来る」と述べている。文化・文政期は、学術文化、殊に洋学の発達に特徴づけられる、我が国の歴史上、特筆すべき時期であった。景保は文化元年に天文方に就任し、文政十二年に獄死したので、活動期は文化文政期とほぼ重なる。常に幕政の中心にいて活躍したが、その業績はまだ十分に検討され評価されているとはいえない。非常に有能であり、幕府要人の信頼も厚かった景保が総裁だったことは、伊能図にとつて大変幸福なことだった。もし景保が純粋な学者肌であつたら、伊能図の完成は困難だったのではないだろうか。(了)

【参考文献】

- 『高橋景保の研究』上原久著 講談社
『甲子夜話』松浦静山著 東洋文庫 平凡社
『シーボルト先生』呉秀三著 東洋文庫 平凡社
『大田南畝全集』浜田義一郎他編 岩波書店
『蠻蕪子』作者不詳 国立公文書館蔵
『満文強解』高橋景保著 国立公文書館蔵
『亜欧語鼎』高橋景保著 国立公文書館蔵
『新訂萬国全図』高橋景保編 国立公文書館蔵

『伊能図大全』全七巻 刊行!! —全国巡回フロア展を座右に—

河出書房新社より、二〇一三年一月下旬刊行予定です。フロア展示の大図二四枚、中図八枚、小図三枚の全てを鮮明な印刷で再現。あわせて九州測量終了後に作成された九州沿海図二一枚も収録されています。小図三枚と九州沿海図は直接伊能隊の手になることが確かな貴重な現存図です。概説および各図解説つき。

『伊能大図総覧』(二〇〇六年刊)の豪華大型判とはひとあじ違う、机上で開きやすいコンパクトなA4判です。詳しい内容は同封のパンフレットをご覧ください。

予約特価(七巻、分売不可) 九九、七五〇円
 予約申し込み期限 一〇月三十一日

(会員にはさらに特典があります。購入御希望の方は、期日厳守予約葉書でお申し込みください)

訂正とお詫び

『伊能忠敬研究』第六九号

●155頁 グラビアページ

キャプション中でお名前表記のミス

(誤) 猪原紘太 ↓ (正) 猪原紘太

右のように訂正してお詫び致します。編集部

●19524頁「窪谷婦人妙真のこと」訂正箇所

頁	段	行	正	誤
19	中	枠内	実母	異母
21	上	右7	壬午	壬子
21	上	右9	寡言	寡ん言
24	上	枠内	捻兵衛	？兵衛
24	上	枠内	飯高屋は	飯高屋は

以上、5ヶ所の誤記がありました。訂正してお詫び致します。

窪谷 悌二郎

連載 新説 伊能忠敬物語

第一話

伊能忠敬はなぜ測量をはじめたか（1）

渡辺 一郎

伊能忠敬はなぜ、歩いて日本を測るというよう
な、トンデモない大仕事を始めたのであろうか。
忠敬を語っていて、いつも出る質問である。日本
近海に外国船が出没しはじめた国際情勢からとか
後世のためにいい地図を作りたいという志を立て
たとか、いろいろ言われている。第二の人生の達
人として沢山の忠敬本で解説されているが、なか
なか納得できないから質問になるのだと思うので
私の考えを記してみたいと思う。

*

事業家として成功 御存じのように、六歳にし
て母を失い、幸せでない環境のもとで青少年時代
を過ごしながら、自分を磨いて十七歳のとき、下
総佐原（千葉県香取市）の酒造家・伊能三郎右衛
門家に婿入りする。妻ミチは再婚で、四歳年上の
子持ちだった。ここもすばらしい環境とはいえな
かったが、事業に出精し家業を隆盛に導く。

次の数字は忠敬の婿入り二年前の宝暦二（1760）年の伊能家の店卸帳のデータである。

酒造米	一二七八石
酒代金	一五六四両三分
粗利	二二一両
純益	八一両二分（不良債権一三九両二分差引）

この時期、伊能家は当主不在で、親戚の七左衛門清茂（妻は先代伊能長由の妹）の管理に任されていた。跡取りと定められていたミチが十四歳になったとき家に戻り、清茂の五男景茂を婿に迎えたが、間もなく夫を失っている。

色々あって忠敬が婿入りしたときは、家運隆盛とはいかなかったが、黒字経営で、衰退していたというような話は当たらない。しかし、新主人を迎えるに当たって、家柄でなく人物本位で仕事人間を選んだことは確かであろう。家運挽回が忠敬の第一の役割だった。

*

婿入り十二年後の安永三年（1774）二月の店卸目録帳ではこうなる。

酒造	一六三両三分
田徳	九五両
倉敷・店賃	三〇両
舟利	二三両二分
薪木	三七両三分
炭	一両一分
合計	三五一両一分

酒造の利益は一六三両三分で、忠敬入夫二年前と比較して増えていない。田徳は小作料収入、倉敷・店賃は不動産収入で、舟利は川船運送業である。江戸に薪問屋を出した話が伝えられているが、江戸の町に薪を供給する商いが以外に大きいのに驚く。炭は始めたばかりかも知れないが事業部門として顔を出している。

この表でみるかぎり伊能家は酒造家で、その他は付帯事業である。

隠居前年の寛政五年（1793）の店卸目録帳になると、

酒造	三七〇両三分
田徳・店賃	一四二両一分
倉敷	三〇両
運送	三九両三分
利潤高	四五〇両一分
米利	二三一両一分
合計	一、二六四両一分

となり内容が一変する。酒造が二倍以上になっているほか、倉敷は横ばいながら、小作収入と店賃も五〇%増しになり、運送業も二倍に近い伸びである。なかで最も注目すべきは、安永三年にはなかった利潤高と米利の金額である。

利潤は貸付金の利息であり、いわば金融業収益である。米利は米穀の売買利益である。米の現物や先物を含め活発な取引が行われたことを推測させる。

忠敬の家産は一口に三万両と伝えられる。かねてから、それだけの身代の蓄積は、酒造や運送、店賃などでは不可能と考えていたが、寛政五年の目録は身代の形成に金融業と米相場が大きく寄与したことを推測させる。また、持越し現金は八千両、田畑は八町歩とも記録されている。千両箱が八個も蔵の中にあつたということは、相当に稼いだといえるだろう。

流布している資産三万両という話の根拠はこうである。第一次測量前から佐原村民により、忠敬の村政における業績を顕彰すべく箱訴がおこなわれていることが、先祖以来の伊能家の業績を記した『旌門金鏡類録（せいもんきんきょうるいこ）』の記事のなかに出てくる。

吟味のため勝手掛勘定奉行・柳生主膳正から村人一同が呼び出され、御勘定、公用人など立会い

で、白洲で奉行から直接伊能家の商売向きのことを聞かれた。

酒造高を尋ねられて、藤左衛門(名主)から「年により増減があるが、およそ千石余」と答える。株高はと聞かれ、源兵衛という者から「二千石余」と答えている。

三郎右衛門の身上(財産)について「伊能家の身上はいかほどあるか」と訊ねたのに対し、「この御尋ねは、確とはわかりかねます。そういう質問には答え難い」と申し上げたところ「しかとはわからなくとも世間の風説ではどのくらいか、五万両くらいか八万両くらいか」とお尋ねなので、与左衛門という者から、「そんなにはないでしょう、風説では三万両くらいもあるのではないかと云われている」旨御返事をした。

また、藤左衛門という者から「営業は米穀商と酒造が中心で、他に地店貸を一〇〇軒余持つており、奉公人は店の使用人六・七人、下女五・六人のほか、酒造のときは米搗きを二・三〇人雇うから、全部で五〇人くらいになるでしょう。土地は本田高百石、新田二町歩余り、作奉公人も五・六人頼んで手作りもしている」と答えている。

ここに出てくる三万両を、明治の伝記作者・大谷亮吉が使ってから数字がひとり歩きしているのである。『旌門金鏡類録』は伊能家が名家であること、先祖以来佐原村に尽くしてきたことを編述した史料で、忠敬在世中から息子の景敬の手で書き始められたという。

したがって、史料として額面どおり受取りがたい面をもっているが、噂としての三万両という数字を記録として残していることは、伊能家も認めたものと考えてよいだろう。

さて、三万両は今の税金に直したらどのくらいの価値があるのだろうか。これは大変難しい。

*

一両の価値 日本銀行金融研究所貨幣博物館サイトによると、一応の試算として、江戸時代中期の一両(元文小判)を、米価で比較すると一両Ⅱ約四万円、大工賃金で比べると一両Ⅱ三〇〜四〇万円、そば代金では一両Ⅱ一二〜一三万円になるという。

江戸時代は物の値段が高くて、人件費が安かったからであるが、現代は物資の生産力が上がって、物が安くなり、人件費が高騰している。物の値段といっても、原価の大部分は人件費という品物も多い。仮に一両を三〇万円と仮定すると伊能家の資産は九〇億円、二〇万としても六〇億円である。事業家として成功したといつてよいであろう。

*

天文暦学を志す ここで仕事をやめて楽隠居してもよかった。しかし、彼にはもう一つしなければならなかった。佐原ではお金があるだけで、教養が無い者は旦那とは言われなかった」とは忠敬研究の先輩の故小島一仁先生の説であるが、伊能家の周辺には凄い先輩が多かった。

祖父にあたるが、四代前の伊能景利は隠居後一五〇年前からの佐原の古記録を収集し部冊帳という史料集を編術した。佐原市で解説刊行されたが、B5版前巻一冊、後巻二冊の全三冊で、総頁数一、六四一頁の大冊である。

親戚の伊能茂左衛門家当主の伊能景良は別の名を楫取魚彦といい、忠敬より二二年の年長であったが、佐原で名主など勤めたのち、家を息子に譲り、忠敬入婿の二年後に江戸に出た。若い内から

賀茂真淵門下で国学に出精していたが江戸で大成し、橘千蔭、村田春海、などとともに真淵門下の四天王といわれるようになる。真淵亡きあとは、諸侯などに万葉集を講じたという。(伊能忠敬研究六六号 伊能楯雄)

忠敬は仕事で出府の際は当然魚彦宅に立ち寄ったと思われ、影響を受けていたであろう。養子旦那の義務として家業を隆盛にしたあと、佐原の旦那衆の例にならない、身近の先輩と同じように、文化的、学問的業績を残そうとしたと考えてもおかしくないだろう。

これについて、よく言われるのは忠敬書簡にある「我等幼年より高名出世を好み候えども、親の命にて佐原え養子となり候間、好む所の学問もやめ、云々」の文章である。若いときから学問がしたかったけど、という文脈で語られることが多い。

*

しかし、この文章は前後の経緯を踏まえて読む必要がある。

文化一〇年(1813)二月二三日、九州第二次測量中に、暦局内にある忠敬の上司・高橋景保の役宅が全焼した。景保の手紙によると二二日の夜中の九つ半、物置から出火したという。高橋出火の第一報を送った二五日付け吉田栄六郎の手紙をみて忠敬が、娘の妙薫に送った内輪の手紙があるが、忠敬の本音がよく出ている。

「・・・高橋役所は上の御用もよく、・・・ほかの役所の妬みもあるようだし、高橋氏も勢い過ぎるように聞いている。書状のたびに、へりくだり、態度を慎むよう、申してきたのだが、満つれば欠けるという諺のようになったのは残念です・・・前車のくつがえるは、後車の戒めでもあるから、

本家の火の用心を心配して欲しい」という。

この文言のあとに「我等幼年より高名出世を好み候えども、云々」とつづくのである。景保の不始末を聞いて、親子ほど歳のちがう上司にたいし、しようがないな、との文章のなかに出てきた言葉の綾で、すでに名なり、功遂げた回顧談のようなものである。まともに取り上げる程のはなしではあるまい。

そして、何か学問的業績を、となったとき景利や魚彦の文系指向に対し、理系を指したものでらしい。暦学天文といっても、当時の天文は宇宙の原理を説明するなどという、大それたものではなく、天体の運行を観察して暦を作る学問だった。その精度は日食、月食の発生日時が予報と合致するかどうかによって判断された。

理系の勉強は数学から暦学を指向するのは時の流れだった。暦学者たちは、独自の暦を作り日月食を予測して、その精度を争っていた。忠敬も暦学への希望を周辺の人々に漏らしていたらしい。

*

高橋との出会い 四九歳で隠居した忠敬は五〇歳のとき江戸に出て、一九歳も年下の高橋至時（よしとき）に入門する。ここで、至時に出会ったことが忠敬の成功の第一歩だった。この出会いがなかったら、おそらく伊能測量はなかったろう。

このあたりは、戦前の国定教科書では「若い師匠に辞を低くして入門し、熱心に勉強した」とされ、また、伝記としては出府後、暦学諸家を歴訪して最も合理的で納得がいった至時に入門したと伝えている。しかし、事実はそう単純な話ではなかった。真実に迫るため、約一〇〇年前の、将軍・徳川吉宗の時代から始まった蘭学の興隆までさか

のぼって時代の流れを概観したい。

*

徳川幕府中興の祖 八代将軍吉宗は、実学を好み、自然科学に強い関心をもっていた。とくに天文・気象の観測を自らおこなない、観測機器の製作や改造をおこなわせた。さらに建策をうけて寛永以来の洋書の禁を解除し近代科学へのものを拓いた英君である。

享保三年、長崎から西川如見を招いて天文のことを聞き、また旗本の暦数家・建部賢弘や京都の算学者中根元圭からも意見を聞いた。吹上御園内に大渾天儀、大望遠鏡、圭表儀を設置させ、太陽の南中高度などを自身で観測した。実際に「有徳院大君（吉宗 御測驗『江戸日景』天理図書館蔵）のなかに、享保一七年（一七三二）正月一六日から元文三年（一七三八）三月一六日までの六年間の圭表による太陽の南中高度の観測記録が残っている。

かなり長い期間、観測が続けられており、将軍の気まぐれではなく、深い関心をもっていたことがわかる。調べはじめた初期の享和五年（一二二〇）に、中根元圭の建策をいれ天文・暦学について、寛永七年（一六三〇）以来の洋書の輸入禁制を解除した。

*

洋書解禁 長崎奉行への通達に「唐船持ち渡り候書籍のうち、邪宗門の儀いささかも書きのせ候書物は貞享二年以来一切停止のことに候へども、右法儀に用いるべき類の文句等は弥停止致すべく候。噂までにて障らざる文句書き入れ候分は御用物は勿論世間へ売買いたさせ候ても苦しからず候。尤も吟味の節随分入念紛らわしきこれなきよ

う致すべし」とあったということが、御書物奉行近藤重蔵の記録にある。

このとおりだったとすると、キリスト教関連の書物であっても宗教に関係ない部分は支障ないということになるから大幅な解禁である。寛永七年から九〇年間、ヨーロッパと学問的に交流を断たれ孤立状態にあったのが、天文暦学をキツカケに吉宗の英断で、洋学興隆の端緒をつかむことになった。

*

改暦への吉宗の想い 日月の運行とあわなくなっていた貞享暦を改めたいとの思いが、天文暦学への諮問となり、元圭の建策で暦書をさきがけとして洋書の禁が緩められたが、これをうけて中国の暦学者・梅文鼎が著した『暦算全書』が輸入されたのは、刊行後わずか三年の享保一二年だった。中根元圭が翻訳を命じられ享保一八年には完成する。吉宗の太陽観測データは享和一七年からであるから、この訳業をもとに機器を製作して始められたのであろう。おそろしい行動力である。好奇心といったほうがいいかも知れない。将軍が先頭にたつての事業の影響は大きかった。

引き続き、当初からの目的である改暦のための観測をおこなわせることにして、元文五年西川如見の子正休を召し出して御家人とし、吹上御苑で暦術測量御用にあたらせた。

延享三年には神田佐久間町に天文台を設けて機器を移設し、簡天儀を設置して準備をすすめる。同年に西川と天文方・渋川六蔵に改暦の命令が出された。このとき忠敬こと小関三治郎は二歳であった。西川は天文方を拝命し禄二〇〇俵を賜わったが、京都の土御門家との駆け引きに精力をさか

れているうち、仙洞御所の崩御にあい、計画は中断されてしまう。

再興は宝暦元年（一七五一）であったが、こんどは六月に將軍吉宗が亡くなる。西川にとっては打撃であったが、とにかく改暦はおこなわれ宝暦五年から頒行された。しかしながら、新暦は一〇年もしないうちから、日食予報が外れる。吉宗の意図とは遠く離れた暦であった。暦学者・西村遠里によると、改暦に失敗したのは、吉宗が望む西洋天文学による改暦には人がいなかったことと、西川正休のキャラクターに問題があったためだという。

宝暦暦の失敗 宝暦五年から施行された宝暦暦は、九年後の宝暦一三年の日食の予報に失敗している。暦には九月一日の日食の記載がなかったが、民間の暦学者はそれぞれに推算をして日食を発表していた。土佐の川谷貞六は前年一〇月に五、六分の日食があることを推算し藩侯に報告した。薩摩の磯永孫四郎は四分、京都にいた西村遠里は四分半、麻田剛立は五分と予測した。実際の日食は五分であった。

早速、朝廷では陰陽頭・阿部泰邦に諮問したが、三分以下の日食は暦に記載しない、また推算は幕府の仕事で自分は関知しないと逃げの一手のみであった。

宝暦暦はその後修正されたが、明和四年（一七六七）正月、明和五年一二月、天明四年（一七八四）七月、寛政七年（一七九四）の日食は、暦に記載されたが起らなかった。

また、明和四年六月、天明八年五月、寛政八年の五月の月食も暦にはあったが、実際には起こらなかった。安永二年（一七七三）、安永五年、天明

六年には、閏月の置き方を誤るといふ、暦学の基本的な誤りを犯している。本来、閏月にすべき月を普通月とし、普通月とすべき月を閏月としていた。かくて、暦の権威は地におちていた。

*

西洋天文学の流入 中国では天主教宣教師によって西洋天文学の漢訳がおこなわれ、面目を一新しつつあった。日本ではその漢訳書による研究が進められ、一方で長崎のオランダ通詞の蘭書翻訳による西洋天文学を目指す動きも出てきた。

麻田剛立（あさだこうりゅう）は杵築藩の医師であったが、安永元年（一七七二）に意を決して出奔し、大阪で医を生業としながら天文暦学の研究に専念した。多くの門人がおり、高橋至時、間重富（はざましげとみ）、西村遠里、足立信頭らが著名である。剛立のもとでは、中国経由で入ったヨーロッパの天文学が取り入れられて暦学の面目を一新しつつあった。この時代、日本天文学の先端を走っていた民間天文学者・麻田剛立についてもう少し詳しく眺めてみる。

麻田剛立 伊能忠敬が師事した高橋至時は麻田剛立門下の秀才であった。剛立は享保一九年（一七三四）二月六日、杵築藩の儒者綾部安正の第四子として生まれた。幼名は庄吉良、名は妥彰、璋菴または正菴と号した。その生涯は弟子の西村太冲が著した『麻田剛立先生行状記』に詳しい。幼いとき人の背に負われて散歩するとき、仰いで星を眺め、その名を聞いてことごとく覚えたと伝えられている。天文に関心をもつ素地は幼時からあったらしい。

成人ののちは、独学で医術を学び生業とともに、天文も独学で研究した。明和四年（一七

六七）藩侯の侍医に挙げられ、随従して江戸、大坂を往来し、広く世間一般についても目を開く。しかしながら反面、天文学研鑽の余暇がなくなつたので、数年ののち、藩侯に致仕を願ったが、才能を惜しんだ杵築侯は許さなかった。

意を決して安永元年（一七七二）脱藩して大坂に至る。中井竹山、履軒兄弟の世話になり、姓を麻田と変えて本町四丁目に居を定め、医を業とし、併せて先事館という名の民間研究施設を開いて天文研究に専念した。剛立三八歳のときである。

*

松平定信 は天明七年（一七八七）老中首座になると、改革派の三河吉田藩主松平信明、近江堅田藩主堀田正敦らを登用し寛政の改革を実行した。暦についていえば、暦学者に人を得なかったため將軍吉宗が意図した改暦は失敗し、日食や月食などの暦象が外れていたが、民間から改暦の声があがっていたわけではない。

定信は將軍吉宗の孫である。改革にあたり、享保の治と呼ばれる祖父の業績を十分参考にしている。吉宗が達成できなかった改暦を、改革の一環に組み込もうと考えたのも当然だった。縁つづきの桑名侯松平忠和は、間重富と天文を語る間柄であったという。

定信は忠和を通じて宝暦暦の欠陥とか、麻田一派の暦学研究の動きなどを承知していたのである。彼は幕府内部の諸役人の評判、行動などから世間の風評まで、幅広く政治判断に必要な情報を集めていたことが知られている。暦についても情報が入っていたに違いない。

ところが、寛政五年七月に定信は突然老中を辞任する。そして「改革の方針はこれまでどおりと

する、定信が任用した老中・若年寄はすべて留任させる、政務についても必要に応じ相談にのるように」と將軍から指示をうける。

そういうことなら、なぜ辞任させるのかと議論のあるところだが、改革が大奥の不評を買ったという。予期せざる辞任だったが、円満退職であったことは間違いない。

事実、後任の老中首座は腹心の松平信明だったから全く問題はなかった。改暦についても定信の意思を継いで、松平信明、堀田正敦らが断固として取り組んだ。

高橋・間の召出し 担当者として高橋至時と間重富が召し出されるのだが、その間の計画は内密裡に進められたから記録には出てこない。

大坂定番玉造組の同心・高橋至時と大坂の質商・十一屋五郎兵衛（間重富）は寛政七年三月一八日、大坂町奉行所を通じて、暦学御用のため出府を命じられた。至時はすぐ出府し、四月二八日測量御用手伝を仰せつかった。間は準備出来次第ということだったが、出発間際に病気になる延期して、五月一六日出発、六月二日江戸着、八日に頒暦御用所で御用を勤めるよう申し渡される。

この動きは京都朝廷の陰陽家・土御門家では何も知らず、あわてて江戸の天文方・吉田、山路、渋川へ問い合わせているが、江戸の天文諸家も何も聞いていなかったから知らないと答えている。このように発令は秘密裏におこなわれたが、高橋、間が全く聞いていなかったかという、そんなことは考えられない。

おそらくは桑名侯の縁により間に相談があり、高橋の意見も聞いて事が運ばれたのであろう。重富の息子・間重新の記録のなかに、父が語ったと

いうつぎのような話（要旨）がある。

「あるとき、麻田翁に、近いうちに改暦の挙が行われるだろう。そのときは民間に人を求められると聞いている。たぶん、翁にお召しがあるだろうと話をした。すると翁は、私は杵築の家臣である。故あって国を去り、ここに隠れている。なんでも出て、幕府に仕えることができれば。まして、すでに年老いたり。何事ができようか、といわれた。父曰く。翁の高誼は人の知るところである。（杵築侯の配慮に應える義理を指すか）では高橋氏であろうか、高橋氏は篤実端正の士で暦術に精錬しており、その才は古今に突出している。お召しがあるなら高橋氏だろう。そのときは、翁のこれまでの研究のすべてを高橋に与えて援助してほしい」と、翁は「貴方の考えは大変いい。わたしも全く同意見だ」といわれた。麻田宅に行くごとに、このことを話し合ったという」

＊

間の当惑 ところが、間は高橋を推薦したが、自分も一緒に呼び出されることまでは考えていなかったらしい。うれしいことではあるが、家業のこともあり、複雑な心境だったろう。

間は、多少の可能性は予想したようで、京都の陰陽頭・土御門家の門人にもなっていたが、土御門への手紙のなかでは「夢見る心地だが、お断りすべきかどうか、それにしても一度出府の上で、云々」と述べている。驚く土御門に、事前には何もいわずに調子合わせとるか、本心の一部が出たとるか、二つの立場が考えられるが、高橋と違って家業をもつ間の悩みが大きかったのは事実だろう。かくて改暦の立役者二人は四月と六月に江戸の暦局にはいることになった。

＊

寛政の改暦 の諸準備がととのつて高橋は一月一四日天文方に任命され、寛政八年八月五日改暦の命令が下された。先例に従って京都に改暦御用所が設けられ、吉田、山路、高橋の三人の天文方は九月二四日に江戸を出立する。

間は、天文方同格と発令され、江戸に残って、天文方の奥村とともに、測器の調達などに忙殺された。

今回の改暦は、既存の天文方や京都の陰陽家・土御門との相談なしに準備がすすめられたことが特徴的であるが、強力な推進者は若年寄・堀田摂津守であった。ほかに然るべき人物は見当たらない。いまでも同じだが、改革には無能な既存勢力と調整することは全く意味がない。

見通しが立ったところで、とりあえず二人を呼び出し、出府した高橋、間から改暦についての意見を直接聞き、決断を下したのであろう。

＊

いろいろな困難を乗り越えて、『暦法新書』八巻（暦書六冊、八線表二冊）を寛政九年一〇月一三日、山路、高橋兩名から土御門泰栄に提出、一〇月一九日改暦宣下、暦号を「寛政暦」と賜り、翌一〇年より施行された。

やれやれというところだが、改暦直後の寛政一〇年一〇月の日食は新暦によく合致したというが、享和二年（一八〇二）の日食は一七分のずれが生じていた。寛政暦法も完全なものではなく、ここから再び、高橋の苦闘が始まり、ラランデ暦書管見へと進んでゆく。伊能測量はまだ始まったばかりだった。

寛政暦の精度については、渡辺敏夫『近世日本

『天文学史』に詳しい比較があるが、寛政一〇年から天保一四年（一八四三）までの日食二〇件の誤差は、十数分が二件、数分が八件となっている。誤差はいずれも十側で、系統的な未解明部分の存在が予想されたが、それまでは、この程度の誤差は問題にならなかった。

*

忠敬の出府 改暦のため四月に出府した高橋と、六月の間の出府に時を合わせて、忠敬は五月に江戸に出てきている。偶然というにはあまりにも符合し過ぎた一致である。また、改暦のための仕事で多忙な至時に、いくら辞を低くして頼み込んでも、独学で多少勉強した程度の忠敬が、容易に入門できたとは考えにくい。忠敬を至時に結び付ける、何らかの強い求心力が働いたと考えるほうが納得しやすい。

至時は江戸に出たあと永田馬場山王脇の安部撰津守（武蔵・岡部藩主）の上屋敷に奇遇した（水戸藩士 小宮山楓軒の『懷宝日札 第一一冊』）。忠敬の出府は五月で、伊能家の江戸店に近い深川黒江町（現在の門前仲町）に隠宅を構える。

亡くなった忠敬の三人目の妻・おノブの父・桑原隆朝は仙台藩の江戸詰めの上級藩医（四〇〇石）であるが、名医で藩邸の外に住み、諸大名家にも出入りしていた。

仙台藩から近江堅田の堀田家（一万石）に養子に入り、若年寄を勤めていた堀田撰津守とはとくに強いつながりがあった。

すでに述べたように、改暦の企画、高橋至時、間重富の起用などは秘密裏に実行され、天文方でさえ承知していなかった。これらの特別な情報を入手できたのは、桑原しか考えられない。桑原は

内々で堀田撰津守から事前に情報を得ていた可能性が高い。

*

桑原隆朝 堀田の話聞いて、忠敬から隠居後の目標として、天文・暦学への関心を聞かされていた隆朝は、忠敬との間で

「近く改暦がおこなわれる。ついては大坂から当代随一の先生が下ってくる。師匠を選ぶならこの人だ」

「もし希望ならば、堀田撰津守様にお口添えをお願いしてもよい」

「それはありがたい。ぜひお願いしたい」というようなやりとりがあったのではなからうか。このあとの測量開始までの桑原隆朝の応援、測量開始後の忠敬への尋常でない肩入れは、このように考えると納得がゆく。

立場を至時側に変えてみると、改暦作業の準備を控えて、超多忙な至時に、暦学に関心があるというだけで、田舎から出てきた老人の弟子をとる気があったとは考えにくい。

かつての偉人伝説では、畳に頭をこすりつけて、一九歳年下の師匠に懇願し、至時も忠敬の懇請をもだし難く入門が許されたと伝えるが、様子が違うとおもう。堀田撰津守のお声がかかりともなれば、受けるしかなかったのが、至時の本音だろう。

*

入門ができれば、あとは忠敬の独り舞台である。年若い師匠に対し、徹底して師弟の礼をとる。大金を投じて天文方に匹敵する観測機器を設備する。あきらめるほど熱心に課題を勉強し、天体観測をおこない推歩する。

また師匠に対し十分な経済援助もする。他人の

飯を多く食べた青年時代や養子旦那としての生活の知恵、家業を再建した才覚などによって、至時の信用を確かなものとしてゆく。

前述の『懷宝日札』によれば、至時が將軍に拝謁のときの槍、大紋などの諸道具を整える費用は忠敬が提供したとある。保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』（二九七四）のなかで、広瀬秀雄氏は至時の傍らには、同時にお召しを受けて出府した同門の富商・間重富がいた。新参の弟子の忠敬に頼むことはなかったらうという。

もちろん、間に話しても二つ返事でOKだったろう。しかし忠敬のほうが話しやすかったのではないか。勉強に熱心、かつ至れり尽くせりで自分を立てくれる忠敬に、言いにくい相談をしたとしても、少しもおかしくはない。〔続〕

本稿は、渡辺敏夫『近世日本天文学史』を参考とさせていただきました。御礼を申し上げます。

江波島の絶景―忠敬が見た風景

前田 幸子

忠敬の『測量日記』は事務的な記述が続くなかに美しい風景に感嘆して記した場所が何か所あり、そのひとつが広島市の江波島である。先ごろ所用で広島市を訪ねた折、この絶景の場所を訪ねてみた。

居間より海島を見る。絶景なり

文化三年（一八〇六）三月、伊能測量隊は第五次測量で瀬戸内を測量した。この測量から幕府の事業となったため、広島藩は大船団を出して測量事業を応援した。「浦島測量之図」や「御手洗測量図」は、このときの測量風景を描いたものである。

三月二十一日、四手に分かれた測量隊は、第三隊の下河辺隊は江田島に、その他の隊は江波島に宿泊した。忠敬は止宿先の松坂屋市左衛門宅の座敷から海上の景色を眺めて「絶景なり」と賛嘆、日記に記した。麗らかな春の日、晴天に恵まれて瀬戸内の海は格別に美しかったのだろう。江波島はその後、周囲を埋め立てられて文化八年には陸続きとなった。江波地区は現在も歴史ある町並みが残るが、市街地化が進み、建物が立ち並んで高層建築も増えつつあるようだ。江波山公園の小高い場所から海の方を見ると下の写真のような風景となっており、時の流れを感じざるを得ない。公園の説明板に載っていたかつての江波島の風景を掲げて、忠敬が見た絶景を偲ぶこととした。



写真：上段 江波島旧景（江波山公園の説明板より）

下段 現在の風景（江波山公園より撮影）

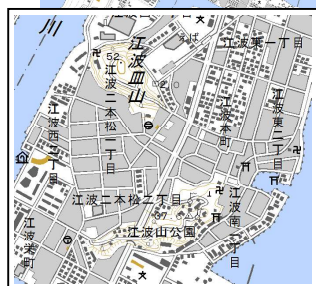
測量日記

文化三年三月廿一日 朝晴。（三番八前夜乗船、江田島二渡海）六ッ後仁保嶋出立。一番東河、高橋、尾形、（吉平、惣兵衛、大助）広嶋城下持安芸郡西新開より初（中略）それより乗船江波嶋へ九ッ半頃二着。四番平山、門倉、大助、宇品嶋一周、江波嶋一周を測ル。九ッ頃二着。二番坂部、小坂、永沢、角二、一番と分測。西新開向ノ仁保嶋の大河浦より初、（中略）仁保嶋ノ向灘人家取付ニ至て廿日三番ノ測ト合ス。三番下河辺、稻生、佐藤、栄二、前夜乗船、佐伯郡能美嶋と安芸郡江田嶋界より初、江田嶋の本浦迄測。又能美嶋の内浦久茂迄測。江田嶋本浦止宿。二番手ハセツ前二着。一番二番四番三手ハ江波嶋止宿、松坂屋市左衛門、家作よし。居間より海島を見る。絶景なり。（此島沼田郡なり）、御用掛江波嶋の大庄屋白石市左衛門、同断同郡庄屋儀左衛門、江波島庄屋藤二郎白石市左衛門倅なり。組頭孫左衛門。此夜晴天測量。江田嶋、能美嶋測量二一番二番四番乗船。



江波山のふもと、衣羽（えば）神社の近くに残る松坂屋市左衛門宅跡。忠敬はここで夜間天測をした。（伊能図★印）

画像：広島市HPより許可を得て転載



国土地理院「ウオッチーズ」



アメリカ大図（彩色）



原図：アメリカ大図
広島（167号）部分



昔は島でした（説明板）

えばやま こうえん えばやま
江波山公園（江波山）

江波は、元々「江波島」という太田側デルタに点在する島でした。江戸時代から埋め立てが進み文化8年（1811）丸子橋で陸続きとなりました。その当時の江波島は「江波山（下山）」と「皿山（上山）」と連なっていました。下山・上山の土砂を埋め立てに活用し現代に至っています。江波山は高さ37.6mで、江波山公園（当時は江波公園）として明治31年（1898）比治山公園とともに市の公園とされました。公衆への遊覧許可は明治36年（1903）でしたが、園内への道路が整備されたのは、明治43年（1910）です。

山武歳時記（三）
「新仏をお迎える」

「新盆棚」

江口俊子

平成十七年八月十日。千葉県山武市横田（八十戸）にお住まいの農家、加瀬哲男さんのお宅に新盆見舞いに伺いました。

数日前、加瀬さんから新盆棚を手作りするので、絵に書いてみないかと言われました。

現在では、新盆は業者が取り扱っているのがほとんどで、手作業での棚は珍しいとのこと。私は十年前にここ横田に引越してきました。この土地の冠婚葬祭を知る願ってもないチャンスだと思いました。

当日、加瀬家の座敷に通され、加瀬さんの父、

明さんの新盆を拝見しました。心を込めて作られた新盆棚は、父方の兄弟の人達の手作業によるものです。新仏をお迎えするのに対応しく、新盆棚は涼やかで、提灯の柔らかい光が儚くとても美しい雰囲気でした。

私が新盆の絵を描いていまして、次々と新盆見舞いの方がみえました。お相手をされていたのは、加瀬さんの母きよさんです。お客様と、戦時中の苦労話などされていました。

さて、横田での新盆の行事ですが、八月七日灯ろうを家に一本、お墓に一本立て、火を灯します。八月二十三日まで火は灯されます。

昭和四十五年頃までは、新盆の家に八月七日、部落の親戚が朝から新盆棚を作りに来ました。昼、冷麦にゴマ汁の食事がだされ、酒もつけられました。新盆棚が完成すると、新盆見

舞の方がきます。以前は提灯や瀬戸物などを持ってきましたが、現在は新盆御見舞いとして、志を包みます。

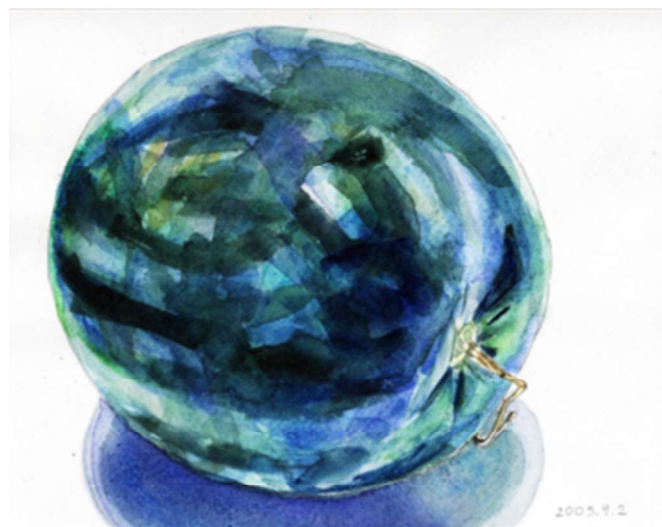
八月十五日、お寺では施餓鬼供養が行われます。ちなみに加瀬家は日蓮宗で、しだれ桜で有名な長光寺の檀家です。

親兄弟、親戚、故人と親しかった人達から諷誦（志のこと）を頂き、まとめて寺に収め、皆で新仏やご先祖に手を合せ、三人の僧侶によるお経に耳をからむけます。

帰りには、新仏の卒塔婆を頂き、お墓に納めます。八月二十四日、盂蘭盆に棚と灯ろうを片付け、新盆棚を作った人達で酒を酌みかわし、寛ぎます。伝統を伝える手作りの新盆の行事には、新仏に対する哀惜の情が感じられて、新仏も悦んで帰ってこれると、思います。



新盆棚。竹を四隅に立てる。棚の上に細縄を回し、稲穂、ホオズキ、三尺ささげを下げる。下の囲いには太い竹を使用、杉の葉で飾る。切子は外に嫁いだ子供が贈る。盆花は、みそはぎ、ススキ、蓮（造花）。



加瀬さんが育てたスイカのお供え。

雑学

宮内 敏

アナログとデジタル

最近の測定器はデジタル表示（数値）が多い。アナログとデジタルの違いを説明するとき、身近な例として時計がしばしば挙げられる。針によって時刻を指す時計はアナログであり、数字により表示される時計はデジタル時計であると。そもそもアナログ量とは連続して変化する量のことであり、デジタル量とは連続していない量（離散している）のことである。

デジタル技術とはコンピュータに代表されるように、(1)と(0)の世界である。

例えば一本の信号線で二つの信号を表現させる。(例：電圧が5Vに近い(1)、0Vに近い(0))マークシートならマークあり(1)マークなし(0)等々である。このようにデジタルデータは信号として取りだす量が1か0で連続しない量である。因みにデジタル量の最小単位は(1と0)の一对で一ビットという。八ビットの集まりは一バイトである。(メモリ容量表示等でお馴染み)

アナログ量である距離も基準となる歩幅で割れば歩数としてデジタル化して表現できる。

電子技術の進歩でデジタル量の数字表示が安価にできるようになったため機器のデジタル表示化が進んでいる。

日々、様々なデータがデジタルデータとして保存されている。デジタル化されたデータは何度コピーされても劣化することはない。著作権問題をひきおこす所以でもある。

デジタルデータがコピーにより劣化しない理由はデータが1、0の世界であるからである。機器

がデジタルデータを読み込む時、1に近ければ1に、0に近ければ0として修正して読み込み、コピーする時は、新たに書き込むからである。

それに対しアナログデータはコピーを繰り返す度にデータは変化（劣化）する。機器が読み込んだデータは元のデータと全く同じでないからだ。アナログデータは連続した大きさをもつ量だから、デジタルデータのように修正読み込みができない。従って、データは劣化していく。

デジタル表示（数値表示）の利点は読み違いがなければ誰が読んでも同じ値になることである。

アナログ表示では目盛と目盛の間は目分量となり測定者による読み取り誤差が生じる。

伊能忠敬の時代、方位盤も象限儀もアナログである。データを正確に読むため、どのような工夫がなされていたのだろうか

トランスバサル（対角線）法とバーニア法

忠敬時代、日本では目盛をより正確に読む方法

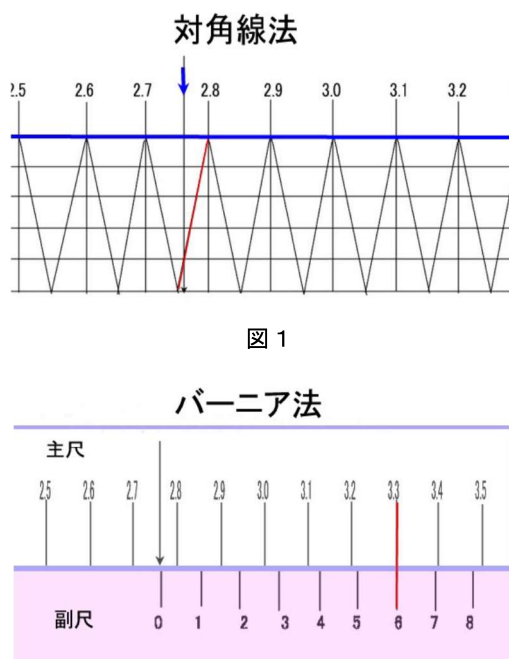


図1

図2

としてトランスバサル法（対角斜線副尺）という方法があった。忠敬もこの方法を用いている。図1において、目盛の下に等間隔の五本の平行線が引かれている。↓の位置が読み取り位置とした場合、読みは2.7と2.8の間であり、更に下から二番目の平行線で右上の対角線とほぼ交差している。したがって、読みは2.76となる。

久米栄左衛門は自作の測量機器にバーニア副尺を採用している。バーニア法とは(図2の場合)主尺目盛九目盛分を十等分に目盛った副尺の0を、読み取り位置↓に合わせる。

副尺は主尺目盛より十分の一狭いので少しづつずれていく。副尺の六番目の位置で主尺目盛と重なっているのを読みは2.76となる。

バーニア法は忠敬の使用した対角線法の二倍の精度といわれる。

バーニア法は一六三一年にヨーロッパで生まれた技術だといわれるが一八世紀になるまで広まらなかった。日本での普及は久米の開発から五十年後のことである。

（久米栄左衛門通賢）一七八〇生れ

香川県坂田出身。地元では塩田の父といわれる。一九歳で麻田剛立門下、間重富に弟子入り。数学・天文・測量を学ぶ。発明家で測量機器も自作した。

伊能忠敬の四国測量では西条城下で忠敬を訪ねて以来、淡路福良へ渡るまでの七十余日案内役など務めた。

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第七回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第五次測量】

(四国沿岸)

自 文化三年一月一日 至 文化三年六月十三日

【表中赤色文字は改訂増補分】

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化三年一月	(1806)					
一	(2. 18)	岡山城下下之町	岡山県岡山市北区 表町二丁目	脇本陣 福岡屋吉郎平衛	間清市郎より書状届	百四十五
二	(19)	同	同	同	午中太陽測定 暦局へ書状を出	
三	(20)	同	同	同	秀蔵外一名、備中国豪谷一覽に行、道遠天氣悪、中途より帰る。	
四	(21)	同	同	同	高橋外四名金山へ、山崎並伯州大山測量に行。忠敬外五名、役所御用初	
五	(22)	同	同	同	忠敬外八名、役所にて一同御用地図を成	
六	(23)	同	同	同	暦局より書状届	
七	(24)	同	同	同	永沢病氣引籠	
八	(25)	同	同	同	善助小者宗兵衛来着	
九	(26)	同	同	同	恒星測定。子正後、木星与四小星凌犯を測	
十	(27)	岡山城下下之町	岡山市北区 表町二丁目	脇本陣 福岡屋吉郎平衛	坂部外一名、金山へ山嶋測量に行、伯州大山を測	
十一	(28)	同	同	同	午中太陽測定	
十二	(3. 1)	同	同	同	午中太陽測定	
十三	(2)	同	同	同	大坂、間へ書状を出す	
十四	(3)	同	同	同	十八日出立の先触を出す。	
十五	(4)	同	同	同	当領より定式の十六日江戸飛脚へ木星測量の用状を出す	
十六	(5)	同	同	同	午中太陽測定と恒星測定	
十七	(6)	同	同	同	測器を磨、荷物を仕舞。 大坂問氏より来状。返書を認暦局行の書状を封じ込み、間清市郎へ遣す。	
十八	(7)	庭瀬町	岡山市	今保屋善右衛門	備中国吉備津宮、並備前国吉備津宮へ参詣	百五十一
十九	(8)	連嶋大江村	倉敷市	庄屋格仙右衛門	恒星測定	百五十一
二十	中食 (9)	玉嶋村	倉敷市	侍格柚木弥市	恒星測定	百五十一
二十一	(10)	黒崎村	倉敷市	名主礼蔵	恒星測定	百五十一
二十二	(10)	入江新田村	倉敷市	名主新兵衛	三手分。寄嶋を測。恒星測定	百五十一

二八	二七	二六	二五	二四	二三			二二			二一			二十	十九	十八		十七	十六					
(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)			(10)			(9)			(8)	(7)	(6)	休	(5)	(4)					
同	同	伯方嶋 木浦村	四坂嶋 同 沖友村	大嶋 本庄村	虫嶋	中渡嶋	大三嶋 宗方村野々江村境	岡村嶋 岡村	大下嶋	岡村嶋 背頭の岬	同 宗方村字幸崎	同 宮浦	同 宗方村	同 宮浦村三櫛山	同 肥海村大見村界	大三嶋 盛村	同	忠海湊	佐木嶋	三原町	三原町	生口嶋 瀬戸田町	三原町	生口嶋 瀬戸田町
同	同	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	同 今治市	愛媛県今治市	同	同 竹原市	同 三原市	同 三原市	同 尾道市	同 三原市	同 尾道市	
同	同	庄屋市右衛門	船中泊	庄屋矢野強八	庄屋伝右衛門	船中泊	船中泊	船中泊	船中泊	船中泊	船中泊	神主三島太祝	船中泊	船中泊	船中泊	庄屋政右衛門	同	綿屋清左衛門	船中泊			塩屋和三郎	塩屋和三郎	
雨天逗留	雨天逗留。岩城嶋にて松山侯より千鯛寒晒箱、被贈受納候所、道中持参難儀に付早速売払候ば代料此度持参なり。	雨天逗留。大嶋、四坂嶋等を測。一同乗船して伯方嶋着	坂部外五名九ツ頃乗船	三手分。大嶋、竜神嶋、棚橋嶋等を測る	恒星測定	八ツ後に乗船。			三手分。大三嶋、岡村嶋、大下嶋等を測る。恒星測定	九ツ頃乗船。翌未明より三手分、船中朝飯して初。	三手分。大三嶋、福嶋、柏嶋等を測る。恒星測定	九ツ前三手共乗船。翌六ツ半頃三嶋各測所へ着	三手分。大三嶋、福嶋、大横嶋等を測る。恒星測定	三手分。大久野嶋、小久野嶋等を測る	三手分。大三嶋、瓢箪嶋、大横嶋等を測る。恒星測定	佐木嶋、小佐木嶋、割嶋、宿根嶋手分測。恒星測定	高橋外七名、夜より乗船。	坂部外三名三原町を測、風強して不成	坂部外三名三原領を測る。前日に続て大風、他全員三原へ乗船。浅草暦局へ用を出す。	坂部外三名三原町を測、風強して不成	大風逗留。	夜、坂部外三名乗船	三手分。高根嶋、生口嶋等を測る	
		百五十七	百五十七	百五十七	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百六十四	百五十七	百六十四	百五十七	百五十七	百五十七	百五十七	百五十七	

[illegible]

二四	二三	二二	二一				二十	十九	十八				十七	十六	十五													
(1 2)	(1 1)	(1 0)	(9)				(8)	(7)	(6)				(5)	(4)	(3)													
敵嶋	小黒神嶋 同 大原浦、岡浦界	同 大黒神嶋 同 大原浦 深井浦持長嶋 東能美嶋 大原浦 東能美嶋 深江瀬 東能美嶋 飛渡ノ瀬	江田嶋 本浦 江田嶋 切串浦 西能美嶋 高祖浦 江田嶋 小用浦 江波嶋	能美嶋、江田嶋界	仁保嶋 (似野嶋)	矢野村、坂村界	仁保嶋 (似野嶋)	矢野村字大屋・坂村字小屋界	吉浦村字三ツ石 似野嶋 金輪嶋	宮原村吳町	同	同	同	同														
同 廿日市市	同 江田島市	同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市	同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市 同 江田島市	同 江田島市	同 吳市	同 広島市安芸区	同 吳市	同 坂町	同 吳市 同 広島市南区 同 広島市南区	同 吳市	同	同 吳市	同	同 吳市														
真言宗 亀居山大願寺	船中泊	船中泊 飯亭主 勝助	船中泊 船中泊 船中泊 船中泊 船中泊	船中泊	西本願寺派 西福寺	船中泊	西本願寺派 西福寺	船中泊	船中泊 船中泊 船中泊	庄屋 十右衛門	同	止宿不都合に付 船中泊	備前屋直助															
四手分。西能美嶋、東能美嶋、大黒神嶋を測。恒星測定。江戸表、間五郎兵衛より書状到着	二番三番四番此夜測量、先へ乗船		四手分。東能美嶋を測。恒星測定		江田嶋、能美嶋を測る。三番止宿		四手分。仁保嶋向灘より船入新開の大岩木迄測。宇品嶋、江波嶋も測。止宿居間より海島を見る。絶景なり。恒星測定		此夜下河辺外三名乗船		雨中に矢野村、坂村界より仁保嶋向灘迄測。外組は雨天逗留、地図の推算		此夜下河辺外三名乗船		四手分。金輪嶋、峠嶋、似野嶋、大角間嶋も測。三ツ石より矢野村、坂村界迄測る。頭治病氣		夜四ツ頃より乗船四手測 各測量場所詰		恒星測定。頭治、尾形病氣		大風雨、船行不成。船逗留		三手分。瀬戸嶋、渡ノ子嶋を測。瀬戸向より吉浦村三ツ石岬迄測。曆局行用状出す。		雨、三手共苦難して測。		三手分。倉橋嶋等を測	
百六十七	百六十七 百六十七 百六十七	百六十七 百六十七 百六十七 百六十七 百六十七 百六十七	百六十七 百六十七 百六十七 百六十七 百六十七 百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七 百六十七 百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七	百六十七

[illegible]

[illegible]

二七	(1 3)	大津嶋	同	同	周南市	備前屋善助	四手分。伊保庄村相ノ浦より堅ケ浜へ繋ぐ。横嶋、上関嶋残り、佐郷嶋等を測る。	百六十九
二六	(1 2)	田嶋村中関町	同	同	防府市	船中泊	此夜も四組各乗船にて測量場へ行。	百六十九
二五	(1 1)	大津嶋 刈尾	同	同	周南市	船中泊	四手分。麻郷村地方海境界より室積村西浜を測る。牛嶋、馬嶋等を測る。恒星測定	百六十九
二四	(1 0)	古市村	同	同	防府市	船中泊	此夜三番四番乗船	百六十九
二三	(9)	徳山城下	同	山口県周南市	領主用意宿本陣	四手分。久米郷村櫛ケ浜より大島コゴ浦迄測る。笠戸嶋および仙嶋、黒神嶋の東側を測る。笠戸嶋、蛇嶋等を測る。恒星測定	四手分。徳山止宿より徳山明神崎迄測る。櫛ケ浜より栗屋村坂田を経て大島村字小子浦迄測る。笠戸嶋、蛇嶋等を測る。恒星測定	百七十五
二二	(8)	笠戸嶋 深浦	同	同	下松市	年寄庄屋与惣左衛門	四手分。仙嶋、黒神嶋の西側を測る。大津嶋、拾嶋等を測る。二十三日より平山、尾形病氣にて引籠。	百七十五
二一	(7)	徳山城下	同	同	周南市	領主用意宿本陣	二番三番此夜乗船、野島へ行。	百七十五
二十	(6)	末武下村西市	同	同	下松市	山城屋伴蔵	三番手、四番手は船泊。	百七十五
十九	(5)	室積村	同	同	光市	庄屋原田瀬兵衛	四手分。徳山止宿より徳山明神崎迄測る。笠戸嶋、大水無瀬嶋等を測る。恒星測定	百七十五
十八	(4)	上関嶋 上ノ関浦天神町	同	同	上関町	備前屋善助	四手分。伊保庄村相ノ浦より堅ケ浜へ繋ぐ。横嶋、上関嶋残り、佐郷嶋等を測る。	百六十九
		馬嶋	同	同	多布施町	船中泊	此夜も四組各乗船にて測量場へ行。	百六十九
		牛嶋	同	同	上関町	船中泊	四手分。麻郷村地方海境界より室積村西浜を測る。牛嶋、馬嶋等を測る。恒星測定	百六十九
		室積村西浜	同	同	光市	船中泊	此夜三番四番乗船	百六十九
		室積村	同	同	光市	庄屋原田瀬兵衛	四手分。徳山止宿より徳山明神崎迄測る。笠戸嶋、大水無瀬嶋等を測る。恒星測定	百六十九
		笠戸嶋 白浜	同	同	下松市	船中泊	四手分。末武下村西市より栗屋村坂田、櫛濱より徳山明神崎迄測る。風雨強測を止て徳山へ行止宿。	百七十五
		笠戸嶋	同	同	下松市	船中泊	三番手、四番手は船泊。	百七十五
		徳山城下	同	同	周南市	領主用意宿本陣	四手分。徳山止宿より徳山明神崎迄測る。櫛ケ浜より栗屋村坂田を経て大島村字小子浦迄測る。笠戸嶋、蛇嶋等を測る。恒星測定	百七十五
		笠戸嶋 深浦	同	同	下松市	年寄庄屋与惣左衛門	四手分。仙嶋、黒神嶋の西側を測る。大津嶋、拾嶋等を測る。二十三日より平山、尾形病氣にて引籠。	百七十五
		徳山城下	同	山口県周南市	領主用意宿本陣	四手分。久米郷村櫛ケ浜より大島コゴ浦迄測る。笠戸嶋および仙嶋、黒神嶋の東側を測る。笠戸嶋、蛇嶋等を測る。恒星測定	四手分。徳山止宿より徳山明神崎迄測る。櫛ケ浜より栗屋村坂田を経て大島村字小子浦迄測る。笠戸嶋、蛇嶋等を測る。恒星測定	百七十五
		同	同	同	防府市	船中泊	二番三番此夜乗船、野島へ行。	百七十五
		野島	同	同	防府市	領主用意宿本陣	三手分。徳山浜崎町より西脇野村新開堤迄測。野嶋等を測。	百七十五
		徳山城下	同	同	周南市	領主用意宿本陣	一番二番共此夜乗船測所へ行。	百七十五
		古市村	同	同	防府市	船中泊	三番大津嶋、馬嶋の残を測る為なり	百七十五
		大津嶋 刈尾	同	同	周南市	船中泊	雨天逗留。	百七十五
		戸田村	同	同	防府市	船中泊	雨天逗留。	百七十五
		大津嶋 刈尾	同	同	周南市	船中泊	平山、尾形、角二、栄二病氣荷物宰領して中関へ行。	百七十五
		田嶋村中関町	同	同	防府市	宮本屋忠兵衛	西脇野村新開堤より戸田村戸浜迄測る。	百七十五
		田嶋村中関町	同	同	防府市	宮本屋忠兵衛	雨天波立測量不成。逗留	百七十五

二〇一三年度

伊能忠敬研究会総会開催される

六月九日(日)午後二時より、東海大学校友会館(霞が関ビル35F)霞の間において、地方からの遠路参加をふくむ、五七名、委任状七七名の参加で開催されました。

総会に先立ち、昨年度新たに入会された香取市長宇井成一さんにより「香取市と伊能家旧宅の被災と復興」の講演がありました(本号六頁「詳報」)。

は、総会(議長・菱山剛秀さん)議題

- ① 二〇一二年度経過報告および二〇一三年度活動計画
- ② 会報発行回数の変更
原稿の確保を含む、編集の負担軽減のため、年四回発行を二〇一四年度より年三回とする
- ③ 会費改訂および入会金の廃止
会報発行回数と連動し、年会費六千円を、二〇一四年度より五千円とする(今年度は会報発行4回、会費は六千円のままです。未納の方よろしくお願ひします)。
また、会員増加をはかるため、入会金を廃止する。
- ④ 伊能忠敬没後二百年(二〇一八年)・研究会創立二〇周年記念事業
当面、会報掲載の論考を中心とする研究書の出版準備をおこなう。

出版費用として、研究会会計繰越金より一五〇万円を限度とする負担を予定する。
その他の記念事業も検討してゆく。

⑤ 千葉県銚子市犬若岬・伊能隊測量記念碑建立に協力

銚子施行八〇周年記念事業の一環として地元の会員中心に進められている「伊能忠敬銚子測量記念碑建立への協力、具体的には研究会からの一〇万円の寄付。

なお、銚子の記念碑については、今年度の研究会の活動とも関連し、十一月十七日(日)と前日の一六日(土)記念講演会の参加を軸に、ジオパーク見学も織り込んだ旅行会開催を予定しています。(別記案内参照)

⑥ 二〇一二年度決算および監査報告と二〇一三年度予算

⑦ 役員改選

今後の活動についての以上の具体的な提案につき、決算および清水靖夫監事による監査報告、予算の提案、役員改選の提案がなされ、全議案一括で承認となりました。

新役員は別表のとおりで任期は二年です。
なお、事務局から会誌の

発行、会費の改訂等については会則改訂の必要があり、その他の点も含めて、会則全体を見直し、二〇一四年度総会に提案してゆきたいという追加説明がありました。

総会終了後は記念撮影につき、朝日の間にて恒例の懇親会が開催さ



れ、遠来の参加者、新入会員などのスピーチも交えて、和やかかつ賑やかなひとときを過ごしました。

霞が関、永田町と日本の政治の中心地を眼下にのぞみ、遠く東京湾も視界におさめる会場もなかなかでした。

地の利を生かして、総会受付開始前の時間帯には、星塾代表、新沢理事の案内で、希望者により、会場近くの憲政記念館庭園内にある日本水準原点建屋(明治二十四年竣工)の見学もおこないました。明治の建築家佐立七次郎の設計、ローマ神殿を模した建物、東京都指定文化財です。(15ページのコラム参照)

伊能忠敬研究会役員名簿

(二〇一三～一四年度)

特別顧問	宇井成一
名誉代表	星塾由尚
代表理事	渡辺一郎
副代表理事	鈴木純子
理事(事務局長)	高安克己
	鈴木準二
	伊能洋
	伊能楯雄
	新沢義博
	高宮勲
	宮内敏
	河崎倫代
監事	清水靖夫

事務局長退任ならびに 代表理事就任にあたって

鈴木 純子

二〇一三年度総会（六月九日）において代表理事に選任された鈴木純子です。微力ではありますが、皆様のご支援をたよりに努めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。これまで六年にわたり事務局長をつとめてまいりましたが、至らぬことが多々ありましたことと、会員の皆さまにはおわび申し上げます。

伊能忠敬研究会も設立から一八年、会誌『伊能忠敬研究』も七号（前身の『伊能図探究』を継承）から出版し、七〇号までと成果を積み上げてまいりました。総会でもおほかりしたとおり、これらの成果は研究会設立二〇周年ならびに伊能忠敬没後二百年記念事業として、まとまったかたちで後世に残してゆくよう、準備を開始しております。これまでの会報に目を通しますと、豊かな蓄積にあらためて目を見開かされる思いがいたします。研究会は新たな地図や史料の発見にも多々かわつてまいりました。現在は全国巡回フロア展示が進行中、秋には沖縄、九州での開催が予定されております。また、力によりは、銚子市在住の会員の努力により、同市の犬若岬の近くに、伊能忠敬測量記念碑が建立されます。気象条件の好転を待つの滞り八日目に成功し、以後の測量活動への確信をもたらし、また本州最東端の地でもあります。時間の流れとともに、小島一仁、安藤由紀子、伊能陽子、佐久間達夫

氏をはじめ、早くから研究活動に尽力された方々との惜別もあり、古参会員の高齢化も否めませんが、新しい会員の加入もあつて、会員数も低めではありますが、ほぼ現状維持で推移しております。本年度より、会員増をはかつて入会金を廃止いたしました。

伊能忠敬および伊能図研究にはまだまだ埋めるべき部分も多く、これに興味をもち、情報を求める方々も各方面に潜在していることと思います。新しいエネルギーの発掘とこれまでの蓄積の補強に力を合わせることでできれば幸いと考えております。皆さまのご奮闘、ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりますが、前代表理事の星埜尚様、長期にわたりご苦勞さまでございました。

事務局長就任にあたって

鈴木 準二

事務局長という重責を担うことになりました鈴木準二です。私はこれまで半世紀にわたつて、地図を趣味としてきましたが、伊能忠敬との係わりはありませんでした。

研究会にも昨年入会したばかりの若造ですが、先輩各位のご指導に頼りながら職務を果たしていきたいと思ひます。今はまだ白紙の状態ですが、内部事情が分かつていないからこそ「外部の目」で見える面もあると言えます。

最近、地理学や歴史学ばかりでなく多方面でブームともいえる「伊能忠敬の研究」を常にリードしてきたのが我々の研究会であると自負を持つて言えます。

しかし我々の研究レベルがあまり

に高すぎて、外部から見ると敷居の高いエリート集団になっていないでしようか。絶海の孤島で特殊な進化をとげたガラパゴス諸島の動物のように、内部で進化しすぎて外部との交流が進まなかったら、その将来が危ぶまれます。

私も遅まきながらガラパゴスに上陸してしまいました。何年かして爬虫類の世界に同化する前に、広い外部との交流窓口となりたいと願つております。

H 25 年度

九州支部・例会報告

九州支部長 石川清一

毎年開催している九州支部例会が去る6月29日（土）午後1時から例年と同じ「福岡市立南市民センター」において14名の出席を得て開催しました。

各地のニュース

冒頭、鈴木代表理事からのメッセージの披露後支部長から6月9日東京で行われた本部総会の報告等を行った後先ずトップバッターに遠藤薫氏の山口文書館収蔵の伊能図についての話があり、続いて昨年入会の平野実氏から前年佐賀市で開催された全国巡回伊能大図フロア展を地元佐賀県土地家屋調査士会副会長として初めて身近かに観た感想のスピーチがあつた。次に平川定美氏から佐世保伊能測量記念碑建設の直近の動向の報告があり具体的に進んでいくとのことでした。

休憩後15時から講演（2）として宮地滋氏による「伊能忠敬の伊方里、鷹島の測量について」詳細な発表が

ありました。そのあと女性会員による卓話2つ、河島悦子氏の身辺雑感、琴女ご子孫の奥永渚氏から近況スピーチがありました。最後に支部長から会員動向や会計報告後、恒例の記念撮影をし17時閉会した。

続いて場所を移し、懇親に入り、野田幹事司会で遠路出席の平川さんの乾杯が始まり、全員の近況スピーチで大変賑やかなひとときでした。最後は長老宮地さんの中締めでお開きとなりました。皆様おつかれさまでした。



伊能忠敬銚子測量記念碑除幕式参加と

銚子ジオパーク研修旅行の御案内

宮内 敏
高宮 勲

銚子市制八〇周年記念事業の一環として伊能測量記念碑の建立が実現する運びとなりました。また昨年十月に銚子半島が「銚子ジオパーク」に正式に認定されました。

銚子は第二次伊能測量に於いて、富士山の方位を測定して測量の正確性を確かめた重要な地点です。研究会から市長さんに建碑を提案した経緯もあり、除幕式にあわせて研修旅行を計画しました。多数御参加をお願い致します。日程は左記のとおりです。

記

十一月十六日(土) 一三時三五分

JR 銚子駅集合

一四時～一六時記念講演会(市民行事)

勤労者コミセン2F 予定

講師…伊能忠敬研究会名誉代表 渡辺一郎

演題…「伊能忠敬はなぜ測量を始めたか」

一六時～一六時三〇分 銚子ジオパークの紹介

一七時～一七時三〇分 犬吠崎ホテルに移動

ホテルのシャトルバス

一八時～ ホテルで懇親会

十一月十七日(日) 九時～一〇時 ホテル

新発見の伊能図鑑賞会

一〇時 除幕式会場へ ホテルのシャトルバス
一〇時～一〇時三〇分 記念碑除幕式
一〇時三〇分～一一時三〇分 千葉科学大学の

カフェマリーナで簡単な祝賀会に参加(招待者以外は参加費が必要です。会費を含む)
祝賀会以降の見学スケジュールは別項を参照。

一六日の宿泊予定

〒288・0012 銚子市犬吠崎九五七四―一

「犬吠崎ホテル」 旧京成ホテル

電話:0479・22・8111

和室 男女別相部屋

(申込区分・費用)

1 宿泊+懇親会+祝賀会 22000円

2 懇親会+祝賀会 10000円

3 除幕式祝賀会のみ20000円

の予定ですが、詳細は追って参加者に連絡します。

(注) ジオパーク関係見学の移動は、ホテルのバスを予定。

希望者は、右の申込区分 1 2 3 の別を明記し、高宮勲あて十月十日必着でお申し込み下さい。

(申し込み内容)

(1) 参加者氏名

(2) 住所・電話番号・Eメールアドレス

(3) 申し込み区分 1 2 3 の別

申し込み先

高宮勲の自宅

Eメール: takamiya-isaoo@nifty.com

または葉書

〒283・0811 東金市台方八二五―二

別項1 祝賀会以後の予定

祝賀会終了一一時五〇分

自由昼食

千葉科学大学のカフェマリーナ(祝賀会場)で軽食。また、学食も利用可能です。

一、屏風ヶ浦ジオサイト見学(40分)

集合 記念碑の場所に一二時三〇分

出発…一三時一〇分(マイクロバス)

二、犬若(犬岩、忠敬富士山観測点、千騎ヶ岩)

到着…一三時二〇分

見学…五〇分

出発…一四時一〇分(マイクロバス)

三、地球が丸く見える展望館

到着…一四時二〇分着

見学…五〇分

出発…一五時一〇分

四、銚子駅着 一五時三五分… 解散

追記 伊能図鑑賞会は、最近銚子で発見された琵琶湖図の綺麗な写本です。これまで、記念館の二枚を含め四枚しか判っていません。お楽しみ下さい。

懇親会のあとでは、忠敬先生を肴に、伊能測量談義など楽しみたいと思っています。難問の持ち込み歓迎します。何しろ忠敬さん、富士を測りたくて九泊もしたところです。何が起こつても不思議はありません。

銚子研修旅行案内図



(国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図を使用)

参考 交通案内

往路 J R 東京→銚子 (成東まで特急) 東京 11:40 発 銚子 13:31 着
 J R 千葉→銚子 (各駅) 千葉 11:12 発 銚子 12:55 着
 J R 千葉→銚子 (各駅) 千葉 11:42 発 成東乗換 12:44 銚子 13:31 着

高速バス

(浜松町 10:10 東京駅八重洲口前 10:30) 発 銚子駅 12:43 着
 (浜松町 10:50 東京駅八重洲口前 11:10) 発 銚子駅 13:23 着

帰路 J R 銚子→東京 (特急) 銚子 16:38 発 東京 18:27 着

高速バス

(銚子 17:10 発 東京駅八重洲口 19:46 着 浜松町 20:01)
 (銚子 16:10 発 東京駅八重洲口 18:46 着 浜松町 19:01)

訃報(会員)

谷田部勝男さま

(二〇二三年四月五日逝去)

* * *

狼勢津子さん(神奈川県藤沢市)
 総会ではいろいろありがとうございました。とても楽しい日曜日となりました。あらためて入会させていただきます。香取市出身、旧姓が伊能なので、忠敬先生のことをしっかりと勉強させていただきます。

新入会員自己紹介



高木富子さん

(東京都東村山市)

現在は無職です。東村山市の縄文遺跡の遺品の収蔵展示室でガイドボランティアに参加しています。(専門ではなく趣味)「完全復元伊能図」展の堀野氏の熱意に感銘し、又従兄の伊能洋氏のお勧めも頂き、入会させて頂きます。

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 inohken_kaishi@koalanet.ne.jp

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておってください。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方とはなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3469-6752

事務局メール inohken@ae.aunone-net.jp

郵便振替口座 00150-607128610

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「Inopedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/it-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記

◇今年には梅雨明けが早く、梅雨明けと同時に猛暑が続きました。今号の編集を担当させていただきましたが、暑さの中でなかなか集中できず、時間だけが過ぎて行きました。そうした中で、原稿をお寄せいただいた皆様に敬意を表したいと思ひます。お陰さまで、何とか期日までに編集作業を終えたことが出来ました。最終的な取りまとめを助けていただいた編集委員長にも感謝申し上げます。◇本誌の編集はこれまで専用の編集ソフトを使用していたが、今号からMicrosoft OfficeのWordに切り替えてみました。冊子等を編集する専用ソフトではないので、従来どおりの編集ができるか不安もありましたが、ほぼ従来のレイアウトに普及したと思います。◇前号でも編集スタッフへの参加をお願いしていましたが、一般的にご協力いただける方がいらつしやいましたら事務局にご連絡ください。また、原稿をお送りいただく際、直接レイアウトしていただけたら事務局にご連絡ください。また、原稿をお送りするので、事務局にご連絡ください。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。（H）